

# 『留学交流』

2015年 8月号

特集

海外留学することの意義



JASSO

独立行政法人

日本学生支援機構

Japan Student Services Organization

## 特集 海外留学することの意義

- 【論考】** . . . . . 1  
 留学体験のインパクトと経年変化 -社会人としての留学体験評価(2)-  
 How the Perceived Impact of Study Abroad Changes for Individuals over the Years (2):  
 Evaluation Decade by Decade  
 明治大学国際日本学部准教授 小林 明  
 KOBAYASHI Akira  
 (Associate Professor, School of Global Japanese Studies, Meiji University)
- 【論考】** . . . . . 11  
 人文社会科学系にとっての海外留学 -「社会的要請の高い分野」以外の取り組み-  
 Study Abroad for Humanities & Social Sciences: Meeting Stakeholder Needs and Demands  
 岩手大学人文社会科学部 小林 葉子  
 KOBAYASHI Yoko  
 (Faculty of Humanities and Social Sciences, Iwate University)
- 【事例紹介】** . . . . . 21  
 「トビタテ! 留学 JAPAN 日本代表プログラム」 -始動から1年-  
 TOBITATE! Young Ambassador Program: A Year after Launching of the Program  
 文部科学省 官民協働海外留学創出プロジェクト プロジェクトディレクター  
 日本学生支援機構 グローバル人材育成部長  
 船橋 力  
 FUNABASHI Chikara  
 (Public-Private Joint Project for Overseas Education Promotion, Ministry of Education,  
 Culture, Sports, Science and Technology / Global Human Resource Development Division,  
 Japan Student Services Organization)
- 【事例紹介】** . . . . . 28  
 グローバル体験以上の成果を持ち帰るには  
 -東京海洋大学海外探検隊の戦略的な海外派遣について-  
 What We Need Is More than Global Experience: The TANKENTAI's Strategy and Challenges  
 東京海洋大学グローバル人材育成推進室教授 小松 俊明  
 KOMATSU Toshiaki  
 (Professor, Global Office, Tokyo University of Marine Science and Technology)
- 【海外留学レポート】** . . . . . 47  
 私の東京大学FLY Program体験談  
 Three Cases of Freshers' Leave Year Program  
 東京大学文科1類2年 山田 智子  
 東京大学文科2類1年 坪田 大河  
 東京大学文科3類1年 山口 集  
 YAMADA Tomoko (Undergraduate Student, The University of Tokyo)  
 TSUBOTA Taiga (Undergraduate Student, The University of Tokyo)  
 YAMAGUCHI Atsumu (Undergraduate Student, The University of Tokyo)
- 【EYE】** . . . . . 58  
 ブラジル国費海外留学プログラム「国境なき科学」によるブラジル人留学生の受入  
 -ブラジル国費学生海外派遣プログラムを通じた大学国際化-  
 Study Abroad Program with Brazilian Government Scholarship 'Science without Borders':  
 Globalization through Brazilian Government Scholarship Program  
 筑波大学グローバルコモンズ(生命環境系) 野村 名可男  
 NOMURA Nakao (Global Commons Organization, Faculty of Life and Environmental Sciences,  
 University of Tsukuba)

# 留学体験のインパクトと経年変化

## —社会人としての留学体験評価(2)—

### How the Perceived Impact of Study Abroad Changes

### for Individuals over the Years (2):

### Evaluation Decade by Decade

明治大学国際日本学部准教授 **小林 明**

KOBAYASHI Akira

(Associate Professor, School of Global Japanese Studies, Meiji University)

キーワード： 留学体験、留学成果、留学インパクト、グローバル人材、海外留学

#### はじめに

文部科学省は、大学の国際化と人材のグローバル化を推進するために「スーパーグローバル大学創成支援事業」を立ち上げ、機関としての大学改革を促すとともに、企業との連携による官民ファンド250億円を高校生や大学生に直接的に経費支援することで、2020年までに倍増となる12万人の海外留学を実現しようという「トビタテ!留学 JAPAN」制度を推進している。

2013年8月の『留学交流』(vol. 29)では、筆者がアジア大学で実施した米国留学プログラム参加者を対象にした調査(有効回答174名)の結果を報告したが、そのインパクトは経過期間とともに消滅していくものではなく、個人の職業人としての節目にあたっての意思決定等において、有益かつ積極的な影響があり、自分の子供に対しても留学させたいとの意向も見られ、留学に対する高い評価が伺われた。

本稿では、「グローバル人材育成と留学の長期的インパクトに関する国際比較研究」(科学研究費助成事業、基盤A、研究代表者:横田雅弘)グループの一員として行った質問紙調査(有効回答4,489)から、米国への短期留学経験者の結果を抽出し、前回調査<sup>1</sup>の結果と比較考察して発表する。

<sup>1</sup> JASSO ウェブマガジン『留学交流』2013年8月号 Vol. 29を参照のこと。

## I. 調査の概要

### 1. 調査の目的

当該の科研全体の目的<sup>2</sup>は、「教育の質保証と学びの実質化をグローバル人材育成にどう結実させるかは、高等教育における喫緊の課題であることから、このような世界的な動向に鑑み、日本におけるグローバル人材育成の課題と方向性を鮮明にするために海外留学をされた方々の大規模な回顧的追跡調査（ウェブサイトでのアンケート調査）を行い、留学経験がその後のキャリア形成や人生にどのようなインパクトを及ぼしているかを明らかにする。」こととなっている。

本稿では、小林(2013)の結果と比較検討し、科研調査の中から、対象者を大学在籍中に交換留学等で米国への短期留学を経験した者に限定した。特に留学後に留学で得られた効果が薄れてしまうのかどうかを検証することが目的である。

### 2. 調査方法

科研の研究グループは、2014年12月から2015年5月にかけて、ウェブサイトGJ5000「日本の留学交流の活性化を目指すグローバル人材5000プロジェクト」での依頼、科研メンバーのネットワークならびに調査会社を利用したウェブ・アンケート調査で、3カ月以上の海外留学経験のある社会人を対象として実施した。

科研の調査全体としては5,227名から回答を得たが、回答者名や回答内容などから同一人物の可能性、重複者や生年と留学開始年・留学時期などからの矛盾、全体的な回答矛盾や未記入率などを厳しくスクリーニングし、有効回答は4,489名となった。

そのデータの中から小林(2013)と比較するために本稿の分析対象者として抽出したのは、日本で初等・中等教育を受けた者で、日本の大学在学中に単位取得を主たる目的として3カ月以上1年未満アメリカの教育機関（大学や2年制大学）に留学した303名である。また、所属企業からの支援を受けた留学や医療関係者の海外研修等は分析対象に含めていない。2013年の調査研究との整合性の観点から、あくまでも日本の大学在学中に交換留学や派遣留学あるいは認定留学などでの米国留学に限定した。

### 3. 回答者の属性

上記の条件に合致した被験者の属性は次の表の通りである。

---

<sup>2</sup> 「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する調査」のホームページから抜粋。<http://gj5000.jp/questionnaire/>（2015年7月20日閲覧）

項目		人数		計 (人(%))
		(人(%))		
性別		女性	男性	303 (100)
		145 (47.9)	158 (52.1)	
年齢	50歳以上	5 (3.4)	25 (15.8)	30 (9.9)
	40歳代	41 (28.3)	49 (31.0)	90 (29.7)
	30歳代	52 (35.9)	54 (34.2)	106 (35.0)
	20歳代以下	47 (32.4)	30 (19.0)	77 (25.4)
	小計	145 (100)	158 (100)	303 (100)
留学後 経過期間	31年以上	3 (2.1)	21 (13.3)	24 (7.9)
	21～30年	31 (21.4)	38 (24.1)	69 (22.8)
	11～20年	54 (37.2)	51 (32.3)	105 (35.0)
	10年以下	57 (39.3)	48 (30.4)	105 (35.0)
	小計	145 (100)	158 (100)	303 (100)
留学期間	3カ月以上6カ月未満	43 (43.9)	55 (56.1)	98 (32.3)
	6カ月以上1年未満	102 (49.8)	103 (50.2)	205 (67.7)
	小計	145 (100)	158 (100)	303 (100)
職業	民間企業	73 (50.3)	112 (70.9)	185 (61.1)
	公務員	8 (5.5)	11 (7.0)	19 (6.3)
	教員	27 (18.6)	15 (9.5)	42 (13.9)
	その他	36 (25.5)	20 (12.7)	57 (18.8)
	小計	145 (100)	158 (100)	303 (100)

図表1 回答者の属性

今回の回答者の属性を見ると、性別では男女ほぼ50%である。年齢は20歳代以下25.4%と30歳代35%、40歳代29.7%と全体の90.1%と20～40歳代が高い構成率を占めているが、僅かではあるものの50歳以上も約10%となっている。今回の調査の年齢別構成は、ほぼ前回調査と同様である。

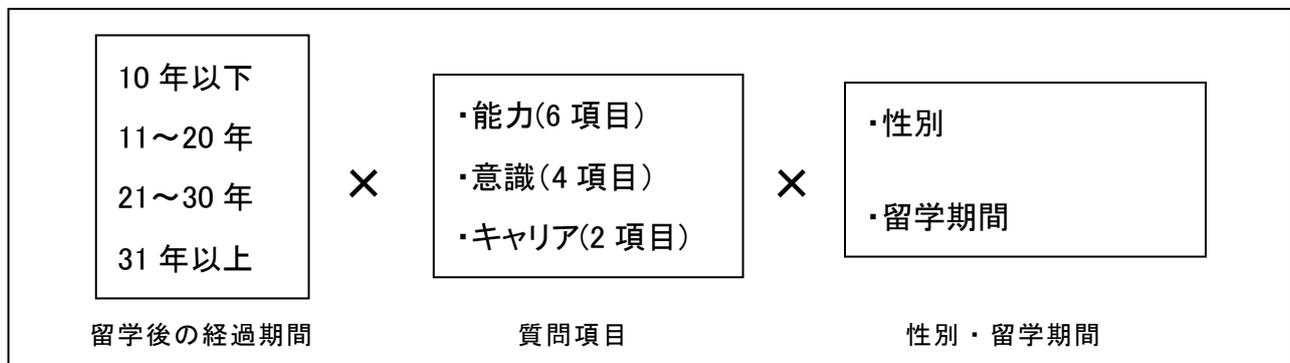
留学後の経過期間については、前回の調査では5年以上25年未満が40%弱、25年以上が60%強であった。今回は10年以下35%、11～20年35%、21～30年22.8%、31年以上7.9%であり、期間の区切り方が異なるが、全体に前回に比べて留学後の経過年数は短い者が多い。現在の職業については、民間企業61.1%、教員13.9%、公務員6.3%を占めており、全体としての特徴は前回調査の民間企業

60.5%とほぼ一致している。

このように、大まかに言えば、前回と今回のサンプルは比較的似ていると言える。ただし、対象者の母集団からすれば、前回は一私立大学の大量派遣留学参加者であるのに対し、今回は3カ月以上の海外留学経験のある社会人一般を対象にしている。

#### 4. 調査項目

小林（2013）は、留学でどのような能力が身についたか、どのような意識の変化があったか、留学がキャリアにどのような影響があったかを分析している。今回の調査から、これに相当する「留学で向上した能力」6項目、「留学で変化した意識」4項目、「職業人としての自分への影響」2項目を抽出し、さらに性別と米国大学での留学期間も合わせて検討した。



図表 2

## II. 調査結果と考察

今回の調査項目は、必ずしも前回調査の項目と同じ文言の質問で構成されているわけではないが、図表3に示す通り、相互に類似すると思われるものについて考察した。

また、前回調査では5件法（1. まったくない、2. あまりない、3. どちらとも言えない、4. あり、5. 大いにあり）を採用したが、今回は4件法での評価となっている。前回の調査では、「5. 大いにあり」と「4. あり」を肯定的な回答群として留学体験がどのような影響を与えたかについて検討しており、今回の調査では「5. つよく思う」と「4. そう思う」を合わせて肯定的な回答群として検討した。

	今回調査	%	前回調査	%
項目 A (能力の 向上)	①外国語運用能力	91.7	・外国語を話す能力	78.8
	②コミュニケーション能力	89.8	・職場で外国語を話す力	61.5
	③異文化に対応する力	89.8	・異文化に対する知識の吸収力 ・他人との違いを受け入れる力	94.3 84.6
	④積極性・行動力	81.2	※今回の調査項目に相互に類似する項目なし	—
	⑤目的を達成する力	80.5		—
	⑥問題解決力	78.5		—
項目 B (意識の 変化)	⑦政治・社会問題への関心	72.9	・世界の政治、経済、社会的な出来事に対する関心	61.6
	⑧外交・国際問題への興味	83.2	・グローバルあるいは国際的な諸問題への関心	66.4
	⑨平和に対する意識	67.0	・全地球的な問題への関心、関与	45.1
	⑩地球的課題に対する意識	63.4		
項目 C (キャリア への 影響)	⑪キャリア設計の上で助けになった	68.3	・キャリアゴールの設定	38.9
	⑫現在の仕事に就く上で助けになった	65.0	・就職活動における職業分野の選択	46.0

図表 3

### 1. 能力の向上（項目 A）

留学のもたらす能力的な向上として、前回は、「異文化に対する知識の吸収力」が全問中最高の94.3%、「他人との違いを受け入れる力」84.6%、「外国語を話す能力」78.8%、「職場で外国語を話す力」61.5%となっており、異文化や異なる文化背景の人々に対する学びとともに外国語運用能力が高く評価されている。

今回については、特に高い評価をみせたのは、「外国語運用能力」91.7%、「コミュニケーション能力」89.8%と「異文化に対応する力」89.8%であり、前回の調査と近い結果になった。また、文部科学省の「グローバル人材育成推進会議」によるグローバル人材の定義<sup>3</sup>の一部である「積極性・行動力」81.2%、「目的を達成する力」80.5%、「問題解決力」78.5%も高い評価を得ており、留学体験が個人のグローバル人材としての能力を向上させると考えられる。

<sup>3</sup> 文部科学省「グローバル人材育成推進会議中間まとめの概要」(2011年6月)

これらの項目では、男女間に有意な差はみられなかったが、留学期間では、全ての評価項目で「3カ月以上6カ月未満」よりも「6カ月以上1年未満」の方が高く評価されている。

今回と前回の調査では図表3で明らかのように、海外留学の経験が外国語運用能力に加えて異文化に対する理解や対応力さらには文化的に異なる背景の人を受け入れる力や意識が向上したと高く評価している点でほぼ一致している。この結果は前回調査で利用したAIFS<sup>4</sup>が2013年に発表したAIFS Study Aboard OUTCOMES, A View from Our Alumni 1990-2010とも近いものである。

## 2. 意識の変化（項目B）

図表3で示したように、今回は外国語能力や異文化適応に関する能力等と比較して「グローバルあるいは国際的な諸問題への関心」(66.4%)、「世界の政治、経済、社会的な出来事に対する関心」(61.6%)、「全地球的な問題への関心、関与」(45.1%)は低い評価となった。これに比べて、今回は、「外交・国際問題への興味」83.2%、「政治・社会問題への関心」72.9%、「地球的課題に対する意識」63.4%と多少評価が高かった。男女間では、ほぼ全ての項目で男性が女性を上回っている。

## 3. キャリアへの影響（項目C）

今回は、「キャリアゴールの設定」と「就職活動における職業分野の選択」はそれぞれ38.9%と46.0%と50%を下回る評価であった。今回は、図表3に示すように「キャリア設計の上で助けになった」68.3%、「現在の仕事に就く上で助けになった」65%といずれも仕事への影響は60%代ということで、前回に比べて高く評価されている。これについては、正楽（2015）も海外留学の体験がキャリア設計や就職活動に役立っていると指摘している。最近、日本の企業は急速にグローバル人材を求めるようになってきているが、今回の調査は、留学後の経過期間が前回よりも短い者が多い。留学をキャリアと結び付けて考える者が増えているためかもしれない。

男女間における差異は見られなかったが、留学期間の比較では3カ月以上6カ月未満よりも6カ月以上1年未満の留学の方が留学後の経過年数にかかわらず、高く評価している。

## 4. 留学後の経年変化

本稿の目的の一つは、留学体験による能力の向上(A項目)、意識の変化(B項目)、キャリア(C項目)が留学後時間の経過とともにどのように変化するかを検討するものである。ここでは、図表2のように「経過期間」に「性別/留学期間」と「質問項目」をクロスさせて分析する。

結論から言えば、今回の調査でも留学のインパクトが10年、20年、30年という留学後の長い年月

<sup>4</sup> American Institute for Foreign Study®



#### 4-1 向上した能力と経年変化

「外国語運用能力」「コミュニケーション能力」「異文化に対応する力」における留学後の経過期間別（10年以下、11～20年、21～30年、31年以上）の評価は、能力の向上に効果大であり経過期間ごとの男女ともに高い評価となっているが、男女間に大きな差は見られない。敢えて指摘するとすれば、「異文化に対応する力」については、全ての経過期間で女性の評価が男性に比べて高くなっている。いずれにしてもこの3つの能力は留学の影響を強く受けていると認識されていて、前回の調査でも留学体験後10年、20年と経過しているにもかかわらず、留学が与えた影響は非常に大きいと評価されており、前回の結果を支持している。

その他の能力として「積極性・行動力」「目的を達成する力」「問題解決力」を設定したが、いずれも男女間の評価に大きな差はみられず、各経過期間において能力が留学の影響を強く受けているとの高い評価である。

留学期間による差異については、ここでも多少の例外はあるもののいずれのグループにおいても80%前後の高い評価がみられ、いずれの経過期間であっても留学期間が長い方がそれら能力の向上を肯定的に評価することを示している。

#### 4-2 変化した意識と経年変化

経過期間による肯定的な評価の高い順に「外交・国際問題への興味」（83.2%）、続いて「政治・社会問題への関心」（72.9%）、「環境・貧困問題等の地球的課題に対する意識」（63.4%）となっている。各経過期間の男女間では政治、社会、外交、国際問題、地球的課題に対する評価では、いずれの経過期間においても男性が女性を上回っているが、経過期間による変化はみられない。それぞれの経過期間でほぼ同様な評価となっている。

男女間では各質問項目で男性の意識変化に対する評価が女性に比べて高くなっている。留学期間による経年変化は、留学期間が長い方の評価が若干高い傾向が強いが、大差はなく、各経過期間における大きな変化はみられない。

#### 4-3 キャリアへの影響と経年変化

各経過期間の男女間では31年以上と21～30年グループでは女性が男性よりも役立ったとしているが、10年以下と11～20年では男性の評価が女性に比べて高く、男女間における有意な差異はほとんど見られなかった。留学期間の違いでは、3カ月以上6カ月未満よりも6カ月以上1年未満の方が個人の能力の向上や社会的、国際的な課題に対する関心がより高いという結果がみられた。

いずれの留学評価項目においても留学後の経過期間による変化すなわち消滅や減少ということは認められず、前回調査の結果を支持することとなった。野水・新田（2014）が指摘するように留学の効

果は、留学直後の効果だけでなく、進路選択や就職活動、そして社会人として活躍するなかであられるのだろう。JASSOの「平成23年度海外留学経験者の追跡調査」<sup>6</sup>では大学・大学院在学中の交換・派遣留学生で現在勤務している被験者の62.1%が「今の仕事に役に立っている」と仕事への有益性に高い評価を与えているとの調査結果もあり、経年変化の観点から「今後も留学経験が役立つ」と考えている者が20歳代93.6%、30歳代92.8%、40歳代92.7%と非常に高くなっている。さらに同調査で「留学経験をしたことは、就職活動や進路の決定のために役立ったと思うか。」との質問に対しても68%と約7割の者が役に立ったことを示唆している。野水・新田（2014）の調査でも同様の質問項目でも約65%の評価を得ており、留学の効果は、留学直後の効果だけでなく、進路選択や就職活動、そして社会人として活躍する中であられるとしている。留学のインパクトは個人の意識、世界観、行動への変容をもたらし、個人的な成長に影響を与えるだけでなく、職業人としてのキャリア形成にも経過期間によらず影響を与えているといえるであろう。

## 5. おわりに

本調査では、交換留学、派遣留学、認定留学といった大学提供の典型的な留学プログラムが、留学経験者に多様な肯定的影響をもたらしていることが明らかになっただけでなく、その評価は留学後の経過期間に関わらず維持されていることがわかった。

なお、本稿は科研調査の一部のデータを用いた分析であり、科研全体の結果については、「日本の留学交流の活性化を目指すグローバル人材5000プロジェクト」のホームページ<<http://gj5000.jp>>に随時掲載される予定である。

## 参考文献

1. 小林明（2013）「留学プログラムが参加者に与えた影響に関する調査 —社会人としての留学体験評価—」 独立行政法人日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』2013年8月号 Vol. 29
2. 正楽藍（2015）「日本人学生の海外留学志向—留学動機と留学後のキャリアの観点から—」 独立行政法人日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』2015年2月号 Vol. 47
3. 野水勉，新田功（2014）「海外留学することの意義—平成23・24年度留学生交流支援制度（短期派遣・ショートビジット）追加アンケート調査結果分析結果から—」 独立行政法人日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』2014年7月号 Vol. 40

<sup>6</sup> 過去15年以内に海外留学経験のある20～40代の一般個人を対象としたインターネットモニターより無作為抽出および大学や大使館、留学経験者同窓会等の協力機関からの紹介を併用したもの。この調査の有効回答数は約20,000人で、留学経験ありと回答し、かつ調査対象者の条件にあてはまった者の内アメリカへの留学は約30%となっている。

4. 日本学生支援機構（2011）「平成 23 年度海外留学経験者の追跡調査」  
[http://ryugaku.jasso.go.jp/link/link\\_statistics/link\\_statistics\\_2012/](http://ryugaku.jasso.go.jp/link/link_statistics/link_statistics_2012/) (2015年7月20日閲覧)
5. 文部科学省（2011）「グローバル人材育成推進会議中間まとめの概要」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/46/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2012/05/11/1320909\\_16.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/46/siryo/_icsFiles/afieldfile/2012/05/11/1320909_16.pdf) (2015年7月20日検索)
6. 文部科学省科学研究費基盤研究(A)「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する国際比較研究」海外留学インパクト調査ホームページ  
<http://100leaders.link/> (2015年7月20日検索)
7. AIFS Study Abroad OUTCOMES –A View from Our Alumni 1990–2010 (2013) American Institute for Foreign Study®

# 人文社会科学系にとっての海外留学

## －「社会的要請の高い分野」以外の取り組み－

# Study Abroad for Humanities & Social Sciences:

## Meeting Stakeholder Needs and Demands

岩手大学人文社会科学部 小林 葉子

KOBAYASHI Yoko

(Faculty of Humanities and Social Sciences, Iwate University)

キーワード：専門性、ASEAN 諸国、海外留学

### はじめに

文部科学省が教員養成系と人文社会科学系に対し「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換」を要請した通知素案に関するニュースが、2015年5月28日にメディア各社によって一斉に報じられた。ただこの素案内容は決して晴天の霹靂ではなく、同文言は昨年の国立大学法人評価委員会部会資料の中で既に使われている(『国立大学法人の組織及び業務全般の見直しに関する視点』について(案)、第48回資料2-1、2014年8月4日)。本稿では文部科学省によって「社会的要請の高い分野」ではないとされた「人文社会科学系」教員と学生にとっての「海外留学意義」について考えてみたい。

その前にまず、こうした議論は日本限定でないことを確認しておきたい。例えば、学術研究成果の社会的還元を大学機関の責任とする考えが世界的に強まる中、可視性・即効性という点で不利な人文社会科学系の存続は厳しさを増している(Benneworth & Jongbloed, 2010)。また、若者の留学経験を望ましいとする見方と同時に、留学経験への雇用者側の低評価という一見矛盾する価値観が共存しているのも日本だけではない(ドイツの例: Petzold & Peter, 2015)。後者の例では日本でも、「グローバル人材」育成の重要性を繰り返す大企業が「学歴フィルター」を用い続け、さらに男女共同参画を謳いつつも性差別は根強いままである。西尾(2012)は女性留学経験者が起業する傾向が高い背景について、その選択は「セカンドベスト」ではないかと述べている(「彼女らが就職を考えた際に、日本の労働市場における「新卒一括採用」という慣習や「女性」であることが不利にはたらいたため、「セカンドベスト」として起業した可能性がある」4頁)。一般的に異文化体験に前向きな人文社会科学系女子学生は多いにも関わらず、産業界は彼女たちを男子学生と同等の、または潜在的にはそれ以上の

グローバル人材になる可能性がある」と認識するには至っていない(Kobayashi, 2013)。

人文社会科学系に対し「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換」を要請する文部科学省の主張も一貫しているわけではない。確かに既に廃止・統合された学部はあるし(例:佐賀大学文化教育学部)、「社会的要請の高い分野」の学部新設を図った例もある(例:和歌山大学観光学部)。しかし同時に教養学部の新設も認可されている(例:千葉大学国際教養学部)。さらに、日本の人文社会科学系において「第一人者」や「気鋭若手研究者」と称される人材の多くは国内で日本語ベースの研究活動を行っており、海外留学も海外学術交流もしていないが、元学友たちに対する遠慮なのか、文部科学省官僚たちが彼らに対し批判的な言及をすることはない。なお、本稿は日本を代表するトップ大学が他の大学の人文社会科学系とは一線を引き、国内最高水準の研究活動遂行を重視する姿勢自体を否定するつもりはない。ただ日本の理工系研究者たちが世界的に影響のある研究成果を出し続けてきた中で、同じトップ大学にいながら人文社会科学系は未だに世界的権威を輩出出来ていない。当然のことながら、世界の第一人者から学びたい優秀な留学生にとって、日本の最高学府の人文社会科学系はセカンドベスト以下かまたは選択外となっている。この原因のひとつには、日本のトップ大学全体の問題に加え(Arimoto, 2015)、人文社会科学系に所属する有識者たちが特に国内に籠りがちで、海外の第一人者たちと対等な、双方向的な、世界水準の学術交流をしないせいではないだろうか。

### 人文社会科学系にとっての「専門性」と新たな取り組み

本稿が問題としているのは、全国各地の大学に所属する人文社会科学系研究者たちが国内中心の研究活動を行っていること自体ではない。問題なのは、人文社会科学系の学術的専門性が未だに打ち出せていないまま、しかし、「何か」を宣伝しなくてはならない状況の打開策として、英会話学校と同様に、「国際」言説の再生産に終始している点である。その視覚的な例が広報向けパンフレットであり、そこには「グローバル」、「世界」、「コミュニケーション」、「異文化」といった用語がちりばめられ、(白人男性の)「ネイティブ教師」による「国際的な」授業を受講し笑顔をみせる日本人(女子)学生の授業風景写真が紹介されている(Appleby, 2014; Rivers, 2013)。

さらに問題なのは、人文社会科学系では、海外留学を含めた「国際」関係の仕事を担当する教員の多くが留学経験のある日本人教員や外国人ネイティブ語学教師に限定・固定され、しかもそうした担当者が学内で出島化・周辺化される点である(都内の有名私立大学法学部の例、Stewart & Miyahara, 2011)。対照的に、理工系の場合、留学経験の有無に関係なく、日本人教員の多くが国際学会にて英語での発表を行い、国際ジャーナルに英語論文を投稿・発表しているため、教員自身が国際交流に対して抵抗感が低い。さらに、日本人教員と白人語学ネイティブ教員で構成され、留学生も少ない人文社会科学系とは異なり、理工系では留学生が多く、外国人教員も「研究者」として採用されている(東京大学の例、Tsuneyoshi, 2013)。つまり、「国際」などのキーワードを売りにする(しかない)人文社会科学

系よりも理工系のほうが国際的な専門性があり、その点を周囲は当然視しているため、「国際」イデオロギーに頼った「国際工学部」などの名称をつけたりはしない。

横田・小林(2013)は「日本の高等教育の課題として、いわゆるトップ大学における国際化の遅れ」について言及しているが、正確には最も遅れているのは人文社会科学系である。繰り返しになるが、広報向けパンフレットでは「海外留学」や「国際交流」を強調するものの、理工系教員に比べ、人文社会科学系教員たちは全体として海外研究者との交流に消極的である。その背景には、英語学・英語教育学・英米文学など「英語」専門分野も含め、人文社会科学系では日本語による学会や研究会、学会ジャーナル、学術書籍、そして海外学術図書の邦訳版が充実しているため、英文論文執筆、国際学会発表、海外研究者との交流をせずとも研究活動に何ら支障がないという事情がある<sup>1</sup>。

そうした中でも将来を見据えた様々な新しい試みも実行され始めている。例えば、海外観光客の間で人気の観光地が近い私立大学短期大学部英文学科は、地元観光産業で率先力となる学生育成を目指すため、伝統的な英文科カリキュラムの中に観光科の要素を取り入れ、香港などで海外インターンシップ研修を企画・実行している(森越・吉田 2015)。類似の取り組みは私立大学を中心に次々と新設されている観光学部でも行われるが、観光学部所属の学生の英語力は必ずしも高くないため、基礎力がある程度備わっている英文学科学生向けのカリキュラムの場合、レベルの高いグローバルツアリズム教育の要素を組み込むことが出来るという<sup>2</sup>。

こうした新しい取り組みは、人文社会科学系が今後目指していきべき海外留学プログラムを考える上で有益な示唆を提供してくれる<sup>3</sup>。従来、人文社会科学系(特に英語科)が実施する語学研修といえば、欧米英語圏語学学校での座学と欧米文化体験のホームステイが主であった。しかし、同様の短期英語研修を実施する高等学校(さらには中学校)が増えるとともに、人文社会科学系に社会的な貢献と実益を求める声が産業界と文部科学省から高まる中、大学レベルの研修を企画する必要性が高まっている。再度の比較となるが、海外留学の面でも理工系のほうが人文社会科学系よりも先を行っている。確かに理工系の(男子)学生たちは海外研修や海外就職に消極的な傾向はあるが<sup>4</sup>、組織とし

<sup>1</sup> 英語教育や関連分野(言語習得・言語学など)においても、英文学術図書の邦訳版が多く出版されている。そして和訳者も利用者も多くが「英語」を専門とする日本人教員である。ただ、和訳依存傾向が見られる専門家たちの共通点(の有無)については不明である(例:出身大学、年齢層、性別)。

<sup>2</sup> 2015年3月16日50<sup>th</sup> RELC International Conferenceにおける口頭発表中の質疑応答(Yoshida, K., & Morikoshi, K. Developing a career success program abroad for English majors in Japan)。

<sup>3</sup> 本稿は観光学部・観光学科による地元への貢献を楽観視しているわけではない。日本各地の自治体が地方消滅の不安を抱えながら観光を通じての地域再興を図っているが、今後ますます日本人(観光客)とその消費力が縮小し続ける中、高い資金力を持つ中国人観光客のような集団を海外から持続的に呼び込まなくてはならない。旅行消費額の高い外国人観光客集団の奪い合いが世界規模で激化する中、国際競争に対応できる人材を観光学部・観光科で育成することは容易いことではないであろう。

<sup>4</sup> 著者は2007年度、カナダ都市部にある評価の高い英語学校にて調査を行った。自主的に留学してい

て「グローバルエンジニア」養成などを目標に掲げ、工業英語力や専門作業中心のプロジェクトを主軸に据えた海外留学プログラムをASEAN諸国にある大学と協定を結びつつ、次々と立ち上げている(例: 芝浦工業大学『平成24年度グローバル人材育成推進事業報告書』)。

なお、星野(2015)はJASSO統計データに基づき、「北米留学では、英米文学等を含む人文科学が圧倒的に多く」、東南アジア留学の場合は「工学」、「農学」の大学生が多く留学している」と報告している(38頁)。その背景には「比較的男性の多い理系分野」(37-38頁)が東南アジアへの海外留学プログラムを積極的に実施し、まとまった数の男子学生たちが参加しているという事情があろう。よって、「東南アジア諸国では生活水準、環境、そして治安などの不安要素が北米に比べてより多く存在するため、女子学生が敬遠しているのではないか」(37頁)という可能性は低い。実際、欧米圏と同様に、東南アジアへ個人旅行や語学留学している女子学生は多い(Kobayashi, 2011)。対照的に、「生活水準、環境、そして治安などの不安要素」が少ない欧米でも、集団引率型でない限り、日本人男子学生たちは積極的に旅行も留学もしない。何故だろうか。男子学生のほうが個人で海外に出ていくことに抵抗感が強いのだろうか。現時点では男子学生に焦点を当てた外国語学習態度研究は限られている(Carr & Pauwels, 2006; Williams, Burden & Lanvers, 2002)。今後、東南アジアを含めた海外留学先での日本人男子学生を対象にした研究が増えることにより、新しい知見が得られるであろう。

話を人文社会科学系に戻す。「グローバルエンジニア養成のための海外研修プログラム」と比較されても遜色はなく、研修に関わる教員と学生たち自身が意義を実感できる海外留学を人文社会科学系は考えていかなければならない。そこで今後ますます求められるのが、人文社会科学系の「専門性」を重視した海外研修プログラムである。ただ、例えば英米専攻学生のために、米文学専攻のアメリカ人学生との交流プログラムはハードルが高く、そうした案に同意する現地校を見つけることは困難であろう。そこで、既に多くの大学の理工系学部や教養教育センターが注目しているように、人文社会科学系の海外留学として、ASEAN諸国を留学先とするプログラムを検討・企画・実行する価値は高い。

残念ながら人文社会科学系の間では未だに欧米志向が根強い。「本物の」「生の」英語(での生活)に憧れて欧米英語圏での語学研修に参加したものの、結局は同じ参加者同士で日本語を使い過ぎたという学生事例は多いが、英語力向上を目的とする限り、欧米英語圏を最善とする見方が人文社会科学系では支配的である。しかし実際には日本企業も注目しているように、「英語漬け」の環境を得やすいのは東南アジア諸国である(フィリピンの寄宿舎型語学学校についての詳細報告: 渡辺・羽井佐 2014)。

ASEAN諸国などの大学生層はかなりのエリート意識、批判的思考力、英語・多言語力を持っている

る日本人生徒の多くは女性であったが、逆に旧帝国大学法学部と大手家電メーカーから強制的に派遣されていた学生と社員たちのほとんどは男性であった。なお、スタッフたちの彼らへの評価は散々であった。若い社員たちの世話をした日本人女性(現地校コーディネーター)は、「学生気分なんですよね」とため息交じりに笑い、ベテランカナダ人教師は「超難関大学の自分たちが一番低いクラスに配置されて屈辱なのだろうが、とにかく言動すべてがひどかった。」と長々と愚痴をこぼした。

ため<sup>5</sup>、両者が交流する場合には後者主導の交流となる懸念はある(「世界青年の船」での類例、Hashimoto & Kudo, 2010)。しかし、彼らこそが、日本の若者にとって将来のビジネスパートナーやクライアントとなるわけであり、彼らと大学時代に交流し、ネットワークを広げておくことは両者にとって得難い財産になるであろう。また、恵まれた学習・家庭環境を当然視しているASEAN諸国の大学生たちと交流しつつ、同時に大学構内の一步外で暮らすストリートチルドレンを目にした日本人学生たちは初めて貧富の格差を実感し、帰国前には気づくことが出来なかった日本国内の社会問題への「気づき」が生じたという報告もある(小林・尾中・宇治谷 2015)。

### 海外留学の促進・阻害要因と専門性

海外留学の阻害要因に関しては『留学交流』に掲載された論文の中でも繰り返し議論されている。その中で特に深刻化しているのが、家庭間・大学間・地方-首都圏間の格差問題である(例:「留学費用が二極化、親の収入格差影響か」、讀賣新聞、2015年6月18日)。さらに、国内外の海外留学研究を見ると、現地環境に適應出来ず、日程途中で帰国したり、現地で引きこもってしまう学生たちは例外的存在ではない(Lucas, 2009 など)。学生たちが抱える経済的または精神的不安要素を考えると、海外滞在日数も現地の人との交流も最小限に抑えられた1週間程度のプログラムを大学機関としても提供し続ける必要があるのだろう。こうしたプログラムを海外旅行のようだと批判することは容易だが、横田・小林(2013:175頁)が指摘するように「旅行だけでも、実際に海外を自分の目で見ることによって海外への関心が高まり、留学を促進することにつながる」可能性はある。

海外留学の阻害要因としては学生の経済的・精神的事情以外にも、本人の語学力や保護者の価値観も挙げられる(後者の例として渡航国への保護者の先入観:小林・尾中・宇治谷 2015)。関連して、息子に対しては海外教育歴を最小限に抑えようとする保護者が多いという報告もある。馬淵(2002:

<sup>5</sup> 2014年3月4日、日本の旧帝国大学のひとつが中心となり、東南アジアの主要大学とともに共同実施している2週間の国際交流プログラムを視察する機会があった。その年はフィリピンを代表する有名私立大学で実施されており、参加した33名の大学生の国籍の内訳は日本14名、フィリピン4名、インドネシア3名、タイ3名、ミャンマー3名、カンボジア2名、ベトナム2名、マレーシア2名であった。視察当日は中国語のクラスとともに、旧帝国大学所属の英語ネイティブ講師によるCross-Cultural Communicationという授業(初日のオリエンテーション授業)を視察させてもらった。その白人男性講師はまず、2006年G8サミット会議場で当時のジョージ・W・ブッシュ大統領が「気軽なテキサス流の挨拶として」メルケル首相の肩をいきなりマッサージし始めた写真とメルケル首相が驚いて肩をすくめている写真の2枚を提示した。その上で、西欧圏内の文化価値観の違いとノンバーバルコミュニケーションについての導入を行った。10名程度の学生たちが参加していたが、講師に促されても日本人学生たちから発言はなかった。対照的に、フィリピン人大学生が流暢な英語で、その講師の解釈—前後の文脈を無視した形で2枚の写真を取り上げ、文化差を強調した解釈—を批判した。不意を打たれた形の講師は言葉が出なかったため、その学生は講師を真っ直ぐに見据えたまま意見を繰り返した。ようやく講師が学生の解釈もあり得ることを短く認めた後、すぐに別の話題に移ったという場面があった。その間に他の学生たちからの発言はなく、彼らの理解度がどの程度のものだったのかは不明である。

168-169) は海外駐在員家族と現地校スタッフの間で「非常によく語り交わされているディスコース」として次の2つを紹介している：(1)「男の子は中学に入ったら、できるだけ早く帰国させて、国内の高校から大学進学へ備えなければならない。でも女子の場合は、様々な事情によって、海外の高校や大学を出ることになっても、将来はあまり困らない」；(2)「女子ならば、これからの国際化の時代に英語ができていればいい。でも男子は、語学力も大切だが、それだけでは足りない。やはり、国内でのよい進学、そして就職が、男子の場合、その人生を考えるとどうしても求められる」。

上記で見てきたように、参加予定者の経済力・精神力・語学力、保護者の価値観を考慮すると、海外旅行に近い海外留学は現実的な選択肢であり、人文社会科学系が提供する複数のプログラムのうち、導入的なプログラムとして位置づける分には問題ないといえよう。星野(2015:44)は「東南アジア留学が修学旅行のような、本来留学と位置付けるには程遠い、大学の留学生数の実績報告だけの見せかけになっていないだろうか？」と懸念しているが、その懸念は多くの大学が欧米圏各地で数多く実施している短期語学研修にも向けられるべきである。そもそも、そうした大学生向けの語学研修よりも、学校一大行事としての海外「修学」旅行のほうが「学び」を重視しているように思われる。ただいずれにせよ、海外旅行のような海外語学留学であったとしても、それが学生の成長につながる可能性がある以上(横田・小林 2013)、そうした個人的経験を否定する理由はない。

その一方で、「専門性」のある学部・課程として存続し続けることを目指す限り、人文社会科学系としての専門性を軸に据えた海外留学プログラムの模索を続けなければならない。そのためにはまず、前述したように、理工系よりも国際的でない人文社会科学系の国際化が必要である。なお、若手の中には現状を変える力があっても、周囲に同化せざるを得ない状況に陥り、実力を発揮することが出来ない状況についても報告されている(日本の事例：Kiernan, 2010；韓国の事例：Shin, 2012)。体質を根本的に変えていくためには、人文社会科学系研究者を育成・輩出し続ける日本のトップ大学と彼らの影響力が大きい国内学会や研究会の変革が不可欠である。

### 人文社会科学系女子学生にとっての海外語学

人文社会科学系の中でも特に「言語」「文化」といった用語が入った専攻プログラムでは女子学生在籍率が高い。この傾向は世界的に言えることであるが(Petzold & Peter, 2015)、日本の特徴は「卒業後、英語を活かして活躍できる女性」や「世界と日本の架け橋となりうる、国際感覚を備えた人材」を育成することを華々しく謳っている点である(ある大学2校のHPからの実例)。見方を変えると、そうした将来の夢を目指す(ことを社会化されている)女子高校生たちに人文社会科学系の専攻プログラムは依存しているわけである。本稿はジェンダーに焦点を当てたものではないが、後半の関連テーマとして、女子学生たちの国際志向に依存する人文社会科学系は今後どのような海外研修を企画・実行すべきなのか考えてみたい(「国際的志向性」については八島 2004 を参照)。

その一つの選択肢としてまず思いつくのは、女子学生たちが「世界を舞台にして活躍する女性」と交流する機会を盛り込んだ海外研修の実施であろう。ただし、この方向性には難点がある。つまり、多数派の一般女子学生たちと一握りのエリートキャリアウーマンの間には隔絶が大きく、前者が後者を現実的なロールモデルと認識するのは難しい。実際、西尾（2012）が取り挙げた女性企業家たちの「ほとんど」は「アメリカの大学を卒業あるいは大学院を修了」し、その「最も多かった専門分野はMBA（経営修士号）コース」であった（3頁）。

その一方で、人文社会科学系の女子学生たちが現実的に目指すことができる「語学を活かした」進路を提示することにも注意が必要である。なぜなら、そうした進路は女性向きで周縁的なものに限定されるためである。例えば、シンガポールや香港などにある日系企業に期間採用されて働くことは、多くの人文社会科学系女子大学生にとって現実的な選択肢である。しかし、その低い地位の不安定さは、本社から派遣される日本人男性駐在員の地位とは大きな差がある（タン・合田・マクラージュ 2008；中澤・由井・神谷・武田 2008）。さらに多くの女性雑誌記事に追従することも避けなければならない。英語や中国語のビジネス言語特集を頻繁に組むビジネス「マン」向けのビジネス雑誌とは対照的に、女性雑誌が推奨する外国語学習はあくまでも女性が女性としての性役割を果たし続ける範囲内での学習である（例：海外就職や外資系転職のためのTOEIC対策、副業として児童英語教師や翻訳家になるための勉強、「女子力」や「生きがい」のための外国語学習）（Kobayashi, 2014, 2015）<sup>6</sup>。人文社会科学系が海外研修を企画する際に注意しなくてはならないのは、女性を周辺部に押し留めておくことになる選択肢のみを無批判に女子大学生たちの前に提示することである。

以上の点を踏まえると、現時点で最も妥当な選択肢は、やはり ASEAN 諸国などの大学で学ぶ同世代の人文社会科学系女子学生との海外交流であろう。もちろん、学問領域が異なる学生同士の交流の意義を否定するわけではないし、同じ人文社会科学系であっても、富裕層出身であることが多い ASEAN 諸国の大学生たちと一般家庭出身の日本人大学生との間に英語力やエリート意識の格差は生じるであろう。しかしそれでも、同じ人文社会科学系で同じ分野を専攻する女子学生として意見交換すること

<sup>6</sup> 数多くの「ビジネス（マン）雑誌」が発行され続けている中、働く女性向けの雑誌は長いこと『日経ウーマン』だけであった。ただ、「すべての働き女子を応援します！」と謳う『日経ウーマン』が、日本の多くの「働き女子」が抱いている「正社員として退職まで働きたい」という希望を応援する立場は取っていない。こうした中、2014年11月、エリート女性を念頭に置いた『プレジデントウーマン』が創刊され、2015年6月以降は月刊化されることとなった。出版社は「ビジネス雑誌」の代表格である『プレジデント』を発行するプレジデント社であり、雑誌の謳い文句は「私たち働く女性のための新雑誌」である。どのような「新」雑誌になるのか、今後注目したいが、参考までに両雑誌の最新号（2015年7月号）の特集記事構成を示す：

『日経ウーマン』－「働く女性 1200 人のお財布調査で判明！ お金がふえる人の 10 のルール」「1 週間で脚が変わる！ 疲れ・むくみが取れる美脚ケア」「年齢を重ねるほど楽しくなる！ フランス流仕事と人生の楽しみ方」－

『プレジデントウーマン』－「トップ営業に学ぶ「美しい伝え方」入門」「格差時代のボーナス&資産運用術」「社内政治学検定付き！ 男と女の社内政治学」。

は、双方にとって専門性のある貴重な学びとなるに違いない。

## 結語

最後になるが、人文社会科学系に所属し留学交流に携わっている多くの教職員スタッフの方々に深く敬意を表したい。なお、本稿の草稿内容は2015年7月4日に多摩大学湘南キャンパスにて開催された日本国際文化学会での口頭発表に基づいている（「海外語学体験からの脱却：教養系分野による模索と課題」）。司会をして下さった鳥飼玖美子先生を始め、発表後にも多くの先生方より声を掛けて頂き、非常に有益なご助言や情報の提供を頂いた<sup>7</sup>。本稿内容の責任はもちろん著者にあるが、先行文献だけではなく人文社会科学系の仲間たちとの意見交換を踏まえた本稿を通じ、何らかの専門的メッセージを発信することが出来たならば、なにかと風当たりの強い領域に身を置く一人としてこの上なく光栄である。

## 引用文献

- 小林 葉子・尾中 夏美・宇治谷 映子(2015)「アジア新興国における海外体験プログラム：フィリピンの事例から」異文化間教育学会・共同口頭発表（千葉大学 6月6日）
- レンレン・タン(Thang, Leng Leng), 合田美穂, エリザベス・マクラークチュアン(MacLachlan, Elizabeth) (2008)「仕事と自己の相互関係—シンガポールにおける日本人女性の経験」足立 伸子(著)『ジャパニーズ・ディアスポラ—埋もれた過去闘争の現在不確かな未来』新泉社
- 中澤 高志・由井 義通・神谷 浩夫・武田 祐子(2008)「海外就職の経験と日本人としてのアイデンティティ：シンガポール」『地理学評論』81(3)：95-120
- 西尾 亜希子(2012)「なぜ女性社長には留学経験者が多いのか—女性社長の生き方に学ぶ—」『留学交流』5(14)：1-7頁。
- 星野 昌成(2015)「日本人大学生の東南アジア留学の現状とその特徴—JASSO統計から見えるもの」『留学交流』2(47)：31-47.
- 馬淵 仁(2002)『「異文化理解」のディスコース—文化本質主義の落とし穴』京都大学学術出版社
- 森越 京子・吉田 かよ子(2015)「グローバル連携による専門性と語学力強化を図る「ホスピタリティ教育」教授法の研究Ⅰ—企業・専門家とのネットワーク構築に関して」『北星論集(短)』第13号(通巻第51号)：1-20頁。

<sup>7</sup> 日本国際文化学会は会員同士がお互いを「さん」で呼び合う伝統があるが、ここでは敬称を使わせて頂いた。

- 八島 智子(2004) 『外国語コミュニケーションの情意と動機』 関西大学出版部
- 横田 雅弘・小林 明(2013) 『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』 学文社
- 渡辺 幸倫・羽井佐 昭彦(2014) 「フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響：継続的インタビューを手掛かりに」『相模女子大学文化研究』32：47-66 頁。

Appleby, R. (2014). *Men and Masculinities in Global English Language Teaching*. New York: Palgrave Macmillan.

Arimoto, A. (2015). Declining symptom of academic productivity in the Japanese research university sector. *Higher Education*, 70 (2), 155-172.

Benneworth, P., & Jongbloed, B. W. (2010). Who matters to universities? A stakeholder perspective on humanities, arts and social sciences valorisation. *Higher Education*, 59 (5), 567-588.

Carr, J., & Pauwels, A. (2006). *Boys and Foreign Language Learning: Real Boys Don't Do Languages*. New York: Palgrave.

Hashimoto, H., & Kudo, K. (2010). Investment matters: Supremacy of English and (re)construction of identity in international exchange. *Language and Intercultural Communication*, 10(4), 373-387.

Kiernan, P. (2010). *Native Identity in English language teaching: Exploring teacher interviews in Japanese and English*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Kobayashi, Y. (2011). Expanding-circle students learning 'standard English' in the outer-circle Asia. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 32 (3), 235-248.

Kobayashi, Y. (2013). Global English capital and the domestic economy: The case of Japan from the 1970s to early 2012. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 34(1), 1-13.

Kobayashi, Y. (2014). Ideological discourses about learning Chinese in pro-English Japan. *International Journal of Applied Linguistics*. DOI: 10.1111/ijal.12072

Kobayashi, Y. (2015). 'Women's Power Goes Up with Language Study' : Japanese women's magazine construction of ideal female adult learners in gendered Japan. In Allyson Jule (ed), *Shifting Visions: Gender and Discourses* (pp. 138-154). Cambridge Scholars Publishing.

- Lucas, J. (2009). Over-stressed, overwhelmed, and over here: Resident directors and the challenges of student mental health abroad. *Frontiers: The interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 18, 187-215.
- Petzold, K., & Peter, T. (2015). The social norm to study abroad: determinants and effects. *Higher Education*, 69 (6), 885-900.
- Rivers, D. J. (2013). Institutionalized native-speakerism: Voices of dissent and acts of resistance. In S. A. Houghton & D. J. Rivers (Eds.), *Native-Speakerism in Japan: Intergroup Dynamics in Foreign Language Education* (pp. 75-91). Bristol: Multilingual Matters.
- Shin, S-K. (2012). “It cannot be done alone” : The socialization of novice English teachers in South Korea. *TESOL Quarterly*, 46(3), 542-567.
- Stewart, A., & Miyahara, M. (2011). Parallel universes: Globalization and identity in English language teaching at a Japanese university. In Philip Seargeant (ed), *English in Japan in the Era of Globalization* (pp. 60-79). New York: Palgrave Macmillan.
- Tsuneyoshi, R. (2013). Communicative English in Japan and ‘Native Speakers of English’. In S. A. Houghton & D. J. Rivers (Eds.), *Native-Speakerism in Japan: Intergroup Dynamics in Foreign Language Education* (pp. 119-131). Bristol: Multilingual Matters.
- Williams, M., Burden, R., & Lanvers, U. (2002). ‘French is the Language of Love and Stuff’ : Student perceptions of issues related to motivation in learning a foreign language. *British Educational Research Journal*, 28(4), 503-528.

# 「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」

— 始動から 1 年 —

## TOBITATE! Young Ambassador Program:

## A Year after Launching of the Program

文部科学省 官民協働海外留学創出プロジェクト プロジェクトディレクター

日本学生支援機構 グローバル人材育成部長

船橋 力

FUNABASHI Chikara

(Public-Private Joint Project for Overseas Education Promotion,  
Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology)

(Global Human Resource Development Division,  
Japan Student Services Organization)

**キーワード：トビタテ、海外留学、グローバル人材育成、官民協働**

### はじめに

諸外国の海外留学者数が増加する中、2004年以降の日本人の海外留学者数は、2013年に徐々に増加に転じるまで減少傾向にあった。これらの現状をみて、2013年、官民協働で「トビタテ！留学 JAPAN」プロジェクトが立ち上がった。2020年までに大学生等の海外留学を12万人（現状6万人）、高校生の海外留学を6万人（現状3万人）への倍増を目指している。この「トビタテ！留学 JAPAN」キャンペーンは、社会総掛かりで取り組むことが、留学者数を増加させる有効な手段だと考えており、その中でもメインの施策が、昨年からスタートした「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム～」(以下、本プログラム)だ。本プログラムは、民間企業の寄附により支えられており、2020年までに1万人の支援とそれを支える200億円の寄附を目指している。

こうした目標のもと、我々「官民協働海外留学創出プロジェクトチーム」(以下、PT)は本プログラムを実施すべく、平成26年度に設置された。PTのメンバーは、文部科学省、日本学生支援機構、大学からの職員、そして、支援企業からの出向を含む民間企業等の人材から構成されており、それぞれの知見を活かし、新しい取組である本プログラムの運営を行っている。

本稿では、“対象となる留学”、“支援の内容”及び“支援企業の関わり”という観点で、本プログラムを紹介したい。本プログラムのあり方が、社会の様々な場面で行なわれているグローバル人材育成の施策にとって少しでも参考になればと思う。

### 自分の夢・想いを実現するための留学を支援

本プログラムの特徴は様々あるが、第一に挙げられるのが、学生自ら作成した留学計画を支援するという仕組みだ。学生が、留学における目的を考え、その達成に向け、行った先で何をするか、具体的な行動計画を作成する。その計画に正解はなく、何をやりたいのか、自身の夢や想いをしっかり持つことが起点となる。選考の基準と関わるが、計画を実施できる情熱と意志を持っているかが何より大事だと考えている。また、留学中に座学だけではなく、インターンやボランティアといった実践的な活動を行うことを重視している。折角の留学という機会を、学校で授業を受けるだけで終わらせず、多様な国籍・役割の人と出会い、協働し、成果創出に関わることで、そのプロセスの中で発生する葛藤や失敗経験からより深いレベルで多様な価値観や考え方に触れ、グローバル感覚を養ってほしいと考えるからである。

こうした思いを踏まえ、平成26年度（第1期）は4つのコース（自然科学系、複合・融合系人材コース<sup>1</sup>・新興国コース・世界トップレベル大学等コース・多様性人材コース）で、学生の募集を行い、300人の募集定員に対して1,700人の応募があり、最終的に323人が選抜された。そして、平成27年度は、前期（第2期）と後期（第3期）の半期毎に募集を行い、第2期は256名、第3期は404名が選抜された。

また、平成27年度からは、4つのコースの他、地域人材コースと高校生コースを新規に設置することで、その対象を拡大している。

地域人材コースは、地域活性を目指し、地域のグローバル化に貢献する人材の輩出を目的としている。ただ留学するだけではなく、地域企業でのインターンシップを留学前後に必ず行うことを要件としているため、その地域の特徴を理解してから、留学先での学びを深めることができるという効果を期待できるとともに、地域の企業と学生との交流が生まれることで、地域に貢献できる人材を育成したいと考えている。こうした背景のもと、対象となる地域の公募を行い、7地域を選定した。地域人材コースに関しては、各地域で産学官が連携した協議会を設置し、留学プログラムの開発から運営を行うことにしているため、各採択地域が応募・選考を行い、第3期では、42名の合格者を出すに至った。

高校生コースは、将来の選択肢を広げるため、より早い段階での海外経験を支援することを目的に、

<sup>1</sup> 現在は、“理系、複合・融合系分野コース”と名称を変更。

4つの分野（アカデミック分野・スポーツ・芸術分野・プロフェッショナル分野・国際ボランティア分野）を設定し、募集を行い、303名の生徒が選抜された。

4つのコースの第1期の派遣留学生は、昨年8月下旬より順次留学を開始しているが、既に帰国した者もあり、かけがえのない経験ができたという感想を多く聞く。ここでは留学中の者を含め、留学計画や苦労したこと等、以下3点について、派遣留学生の声を紹介することとしたい。

Q1. 留学計画の概要

Q2. 苦労したことや、うれしかったこと

Q3. 今後の夢や目標

【自然科学系、複合・融合系人材コース】アウェイな環境で成果を上げた経験を社会人生活でも活かしたい

岡田茂樹さん（横浜国立大学）、留学先：ブラジル

A1. 修士論文テーマである南米への日本の都市計画技術移転に関する調査と専門家との関係構築を行いました。また、併行してサッカー部に所属し、本場の環境で技術を磨き、最終的にはチーム新人王を獲得しました。



A2. 誰も知り合いがいない中、有識者を探して

協力を仰がなくてはならず、苦労しました。ただ、小さいことでもこつこつ続けることで次第に周囲の理解と協力が得られ、留学生の中で唯一、表彰されたのは大きな自信となりました。

A3. 留学を機にグローバルな事業に従事したいという意欲が一層高まり、2015年4月に総合商社に就職しました。専門分野である都市づくりやインフラ整備に貢献するため、日々努力していきます。

【世界トップレベル大学等コース】夢のNYインターンシップが現実に。日本の魅力を世界に伝えるPRのプロを目指す。

瀧幸乃さん（早稲田大学）、留学先：米国



A1. 多種多様な人と出会い、自分の可能性や自分という人間を追求した1年でした。実践活動として「ボストン日本春祭り」に出展し、約1,000人の方々の夢が書かれた桜型のメッセージカード

を集め、日本の美しい春を表現しました。冬休みには夢だったニューヨークでのインターンシップに参加し、貴重な経験となりました。

A 2. NYでの実務体験を通じて人には誰しもその人にしかない大切なストーリーがあることを学びました。様々な人の想いに熱心に耳を傾けることで、その人の価値観や世界観を受け入れ、自己を見つめ直し、自分が最も大切にしたいことを再確認できました。

A 3. 日本の魅力を海外に広めるPRプロフェッショナルとして活躍したいです。今後は日本国内を旅しながら日本の良いところを探し、同時にPRパーソンに求められる人脈構築能力や書く力、話す力を向上させたいです。

【新興国コース】引きこもりだった自分がラオスの小さな教室で起こした奇跡

高木一樹さん（東洋大学）、留学先：ラオス

A 1. 「引きこもりだった自分を前向きに変えてくれた貧困層の子どもに恩返しをしたい！」・・・そんな思いから、ラオスで初等教育事業の立ち上げに挑戦しました。現場の声を頼りに、映像や音楽を活用した教材制作と授業を実施しました。



A 2. ラオスには人脈も知識もなく、日本とは異なる教育環境の中で効果的な教育方法を模索し、ついにラオス初の掛け算九九の歌を考案しました。生徒が楽しく学び成果を上げると、先生も協力的になり、小学1年生の平均点を15日間で50点近く上げるという成果を出すことができました。

A 3. 誰もが私たちの教材を使いこなせるようなガイドビデオを制作したいです。帰国後も継続して教育支援を続けつつ、国連ユースボランティアへの参加など新しいことにも挑戦して行きたいです。

【多様性人材コース】海外経験が少ない私でも乗り越えられた！異文化での建築&アートプロジェクト

上田早織さん（九州大学）、留学先：フランス



A 1. 世界中から集まる留学生と共に、ヨーロッパの建築と都市空間におけるパブリックアートを学んでいます。授業ではグループで作品を制作し、実践活動としてアテネとパリで設計を行いました。

A 2. 海外経験も少なく緊張しやすい性格の私に

とって、大勢を前にした英語やフランス語でのプレゼンテーションは本当に大変でしたが、友人や先生の助けにより乗り越えられました。また、異文化での建築プロジェクトの進め方は驚きの連続で、常識に縛られず多様な選択肢を持てるようになりました。

A 3. アテネやパリにおける建築プロジェクトやパブリックアート作品の制作経験を活かし「ものをデザインする」ことで日本社会に貢献していきたいです。

以上4人の派遣留学生の声を紹介したが、こうした形で派遣留学生は、自分の夢・想いの実現のため、様々な国・地域に留学している。

### 留学の質を最大化する事前・事後研修

自分の夢・想いを追及し留学する学生に対する支援の具体的な内容だが、一般的な国の予算による支援に比べ手厚く、奨学金、渡航費、そして授業料等が給付され、これらを返済する必要はない。具体的には、現地活動費として月額12万~20万円を支給するほか、年間上限30万円の補助を留学先の授業料として支給する。こうした経済的な支援の他に本プログラムでは、教育支援として留学前の事前研修と帰国後の事後研修を提供している。

事前・事後研修は、留学という“経験”から如何に学び、その効果を最大化するかを中心に構成している。事前研修では、経験の量を多く獲得するために、“飛びこむ”をキーワードとし、留学中に様々なことに対してチャレンジするよう伝えている。一方で、事後研修では、留学という経験をしっかり振り返り、内省を行うことで、経験の質を高め次の活動につなげることを目的としている。このように経験から学ぶことを中心に研修を構成しているが、その効果をより高めるための起点となると強く感じているのが「自分の軸（アイデンティティ）」を知ることだ。私の海外での体験からも実感するところだが、海外での生活は、文化や環境の違いから自分の価値観が揺さぶられ、自分が何者なのかを問うことが多いと考える。また、経験から学ぶ上でも、自分の軸が定かでないとならば効果的に経験による学びが蓄積されない。そこで事前研修では、少しでも自分の価値観・考え方への理解を深めるために自己分析などを行い、事後研修では、事前研修での自己理解を振り返りつつ、将来の志を考え、自分の軸の整理を行っている。こうした自分の軸を深めていく上で、特に意識しているのが、ロールモデルの提供だ。様々な領域で活躍するグローバルリーダーを招聘し、経験談を語って頂くことで、イメージを具体化できるようにサポートしている。

更に、事前・事後研修では、下記の3つのロール（役割）を提示し、日本代表として活躍してくれることを期待している。

- ① Global Leader：留学を通じて最大限に成長し、将来の「グローバルリーダー」を目指す。
- ② Ambassador：留学期間中は、「日本のアンバサダー（大使）」として日本の良さを発信する。

③ Evangelist : 日本の留学生増加のための「留学のエバンジェリスト（伝道師）」として活動する。

①は、留学中の目標という短期的なゴールにとどまらず、長期的にグローバルリーダーを目指してほしいという期待ではあるが、②と③は、それぞれ派遣留学生へのタスクとして課したものを役割として表している。

②は、事前研修に組み込まれた学習テーマ「日本の理解と日本発信プロジェクト」と関連し、派遣留学生は研修において日本の文化的な背景や良さ、課題を再認識することで、日本の理解を含め、留学先で発信するテーマ（日本発信プロジェクト）を考察することとなる。そしてこれを基に派遣留学生は留学中に「日本のアンバサダー」として日本について発信しなければならない。具体的には、日本のアニメの上映会を行い、そこから見える善悪の考え方などを現地の人とディスカッションすることで、日本人の考え方を紹介するといった活動や、居酒屋でアルバイト経験のある学生は、日本食パーティーをする際に、居酒屋の道具を持ち込み、サービスを提供することで、日本のおもてなしの文化を紹介するなど、学生の個性を活かした活動がなされている。

③は、派遣留学生は選ばれた者としてただ受動的に留学に行き帰ってくるだけでなく、主体的に留学の経験を発信、その成果を社会に還元し留学気運を醸成する、すなわち新たな留学文化を創出する任務を負っている。身近な先輩や友人がその留学経験を語ることで留学を目指す若者が増えることを期待している。このエバンジェリスト活動は、既に帰国している第一期生を中心に活動が行なわれている。具体的な活動としては、“トビタテ！学生発信局” (<http://tobitate-student.com>) というサイトを派遣留学生自らが運営し、自分たちの留学体験やその想いを紹介するというインターネットを活用した発信の他、派遣留学生主催での説明会を各地で行うなど多岐にわたっている。

本プログラムでは、グローバル人材の育成と留学機運の醸成という2つの目的を担っているため、このような形で支援を行っている。今後は、継続的な支援を提供すると同時に、派遣留学生をネットワーク化し、支援を受けた派遣留学生が、エバンジェリスト活動を中心とした活動を通じて、その成果を社会に還元していけるような流れを作っていきたいと考えている。

## 支援企業との関わり

本プログラムは、前述したように、民間企業等からの支援で成り立っている。年間200社の企業訪問を目標として、下村大臣以下文部科学省の幹部が総出で企業を訪問して企業に寄附を依頼した。最初は、なかなか寄附金の拠出決定がもらえない日々が続いたが、企業の意向をヒアリングし制度の内容に反映させたり、民間でファンドレイザーとして活動している人から意見をもらうなどの改善を行い、平成26年3月から企業からの拠出決定が続き、平成27年3月には、目標の半分となる100億円の寄附見込みを突破した。

支援企業には、寄附金という経済的な支援だけでなく、様々な形で、人的支援、物的支援を行っ

て頂いている。その最たるものが、学生の選考だ。本プログラムに応募した学生を、書面審査と面接審査の2段階の選考で合格者を選んでいる。この2つの審査に、支援企業の採用担当者が関わり、学生を審査している。個別企業の判断軸ではなく、異なる企業の選考官が同じ目線で本プログラムの派遣留学生を審査するというのは画期的であり、面接審査を行なった企業の担当者からは、自分の夢を語る学生を見る事で、企業の採用のときに見られない一面が見られてより意義を感じたという御意見を頂いている。採用された学生に対しては、事前・事後研修や留学中にアドバイスを行なうメンターといった形式でも支援頂き、その他、留学中の海外インターンシップ先の提供等、支援の形は多岐にわたっており、社会総掛かりで留学機運を醸成する取り組みとして広がっている。

## 最後に

これまでの1年を振り返り、今後の展望を鑑みると、解決すべき障壁は多い。顕在化している課題の一つとして、想定している応募者数と実際の応募者数に乖離が生じている点が挙げられる。本プログラムの広報は、官民協働ならではのアイデアやリソースを生かしつつ、公式ウェブサイト (<http://tobitate.mext.go.jp>)、ポスターやリーフレット、説明動画、新聞・雑誌等のメディア活用等によって学生や生徒、大学・学校関係者を中心に広く行っているため、本プログラムの認知は高まっていると思われる。しかしながら、学生の本プログラムへの応募状況を見ると、事業初年度となる平成26年度の第1期生には全国221校より1,700名の応募があったが、第2期生、第3期生の定員500名に対する応募はそれぞれ173校より784名、212校より1,290名と第1期生よりも少ない応募数であった。これは、トビタテ!留学JAPANを「知っている」状態から「応募する」行動に移すための動機づけが弱いことが要因であると推察している。

上記課題の解決策としては、学生への働きかけと、教育機関・地域への働きかけを強化する必要があると考えている。学生への直接的な働きかけは、派遣留学生によるエバンジェリスト活動を活用することで、留学を身近に感じ、本プログラムに応募しやすくする効果が期待できる。

また、学生等の留学を直接に後押しする立場にある大学及び高校等の教育機関に対しては、本プログラムで育成したいグローバル人材の社会における必要性や、支援企業が求めるグローバル人材及び学生等の留学に対する理解について問題意識や課題を共有し、教育機関を巻き込むことで「知っている」から「応募する」への後押しにつなげていきたいと考えている。

また、現在の活動は2020年を一つの区切りとしているが、官民が連携してお互いの強みを活用している奨学金プログラムは他に例がなく、この仕組みをどのように社会に波及させ、持続させていくかが重要である。

我々PTでは、今後も支援企業・教育機関と連携を密にし、日本における留学機運を高め、グローバル人材の育成に貢献していきたい。

# グローバル体験以上の成果を持ち帰るには

—東京海洋大学海外探検隊の戦略的な海外派遣について—

## What We Need Is More than Global Experience:

### The TANKENTAI's Strategy and Challenges

東京海洋大学グローバル人材育成推進室教授 小松 俊明

KOMATSU Toshiaki

(Professor, Global Office, Tokyo University of Marine Science and Technology)

キーワード：産学連携、インターンシップ、グローバル教育、海外提携、海外留学

#### 1 若者を海外に送り出すにあたって考えておきたいこと

日本の学生にできるだけたくさんグローバル体験を積みせようと、政府も教育機関も海外研修や語学留学を含めた短期留学を推奨し、日本人学生が大量に海外に送り出されている現状がある。もちろん、世の中が突然グローバル社会になったわけではない（はるか以前から日本はグローバル社会の一員である）。むしろ、これは日本の教育施策が、突然グローバル化に舵を切ったことが原因である。この唐突とも見える施策展開には、違和感を持つ教育者や保護者も決して少なくないだろう。

一方、言うまでもないが、異国の地を訪問することは刺激があり、若者たちが異文化に触れることで学べることは数知れない。毎日、世界中から最新ニュースが流れ込み、日本がグローバル社会の一員であることを実感しない日など、一日もないだろう。

しかしである。若者たちが「初めて」海外に行く場合、それは中長期にわたる原体験となるため、最初の一回目は大切である。極端な話、その原体験がとても不満足な内容に終わってしまったら、相手国に対する長期間にわたる差別に発展し、中には特定の国に対するヘイトスピーチのような行動に出る者もいるかもしれない。こうなっては大ごとである。つまり、海外派遣には「負の効果」もあることを十分認識し、新たな教育機会を作る際には、その内容を慎重に吟味すること、そして学生たちには渡航前の十分な指導と、帰国後のアフターフォローをすることが大切である。教育機関においては、間違っても海外派遣者数を競うことや、予算を承認した行政機関へ数値目標達成の報告をするだ

けに終わらぬよう、「数よりも内容の質」で勝負することを肝に銘じたいものである。

## 2 どのような海外派遣プログラムが今、求められているのか

海外に行ったことの成果が、いい思い出や新しい友人ができた、英語が上達したという程度の教育効果だとしたら、教育機関が公費や大学資金の一部を投入してまで学生のために海外派遣をお膳立てする意味がどれほどあるのか、そこに大きな疑問が残る。

日本にいてもいい思い出や友人は作れるし、英語習得も国内で学ぶチャンスはたくさんある。つまり、海外に学生を多数留学させたことだけで満足するのは教育機関としては怠慢であり、「とりあえず若者に海外を経験させてみる」という考えは、あまりにも戦略性に欠けている。

ではどうすべきか。もちろん専門教育を海外の大学で受けるために単独で留学するのもいいが、もちろんそれができる学生は限られる現状に鑑みて、まずは教育機関としては初めて海外に行く多くの学生たちが挑戦できるような海外派遣プログラムを作り、それを学生に提供することが先決である。

ただし、せっかく海外に派遣するのであれば、ただの語学研修や観光、もしくは企業の工場視察程度をするのではなく、もっと実践的なPBL学習（Project based learning）を現地の活動にふんだんに盛り込んだ海外派遣プログラムを用意してみてもどうだろうか。実際海外にまで行って、日本人学生や引率した教職員だけで集まって討論をするのでは、せっかくの機会がもったいない。現地の学生と交流しても、それが1回きりの食事会程度で終わるのも残念である。

つまり、グローバル人材を育成するための海外派遣プログラムを組む際のポイントは、「日本でもできること」を徹底的に排除し、むしろ「海外に行かなければできないこと」をプログラムに豊富に盛り込むことが肝心である。

そうした海外派遣プログラム開発への教育的なニーズが高まってきたこととは裏腹に、実はこれまでも多くの民間企業や非営利法人が、自ら運営する留学サービスを通じて、短期から中長期にわたる海外留学やインターンシップ、国際ボランティアのプログラムを提供してきた経緯がある。個別の高等教育機関が、そうした先に半ば丸投げのように業務委託をするケースもあるが、大学独自の教育目的や目標を包括的に達成するためには、そうした丸投げでは海外派遣者数を稼ぐことはできても、大学教育全体との親和性や戦略性が足りないこと、そして中長期的な継続性への配慮から考えれば、独自にノウハウを蓄積していく必要があることからしても、私は大学が独自に海外派遣プログラムを開発することがより一層進むことに期待している。

これから詳細をご紹介します東京海洋大学のケースは、グローバル人材育成推進事業の下、大学独自に海外派遣プログラムを開発するのが正しいアプローチであるという結論に至り、2012年から取り組んだ実例である。具体的には、この後で詳しく述べるが、ポイントは「渡航前の準備段階で教育機会を充実させること」、「海外に行つてしかできないことを派遣期間中に徹底して行うこと」、「海外の大

学やグローバル企業と戦略的な連携をすること」、そして「帰国後に学生たちが活躍する場を継続して提供すること」など、この4つに集約される。では次章から、具体的な取り組みをご紹介します。

### 3 「海外探検隊モデル」のご紹介

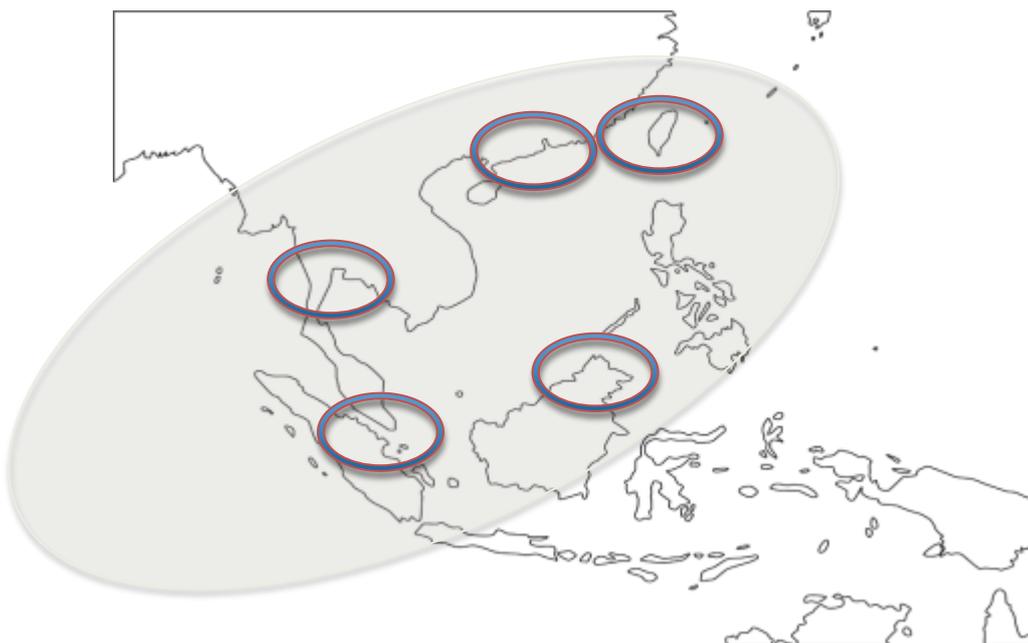
東京海洋大学ではグローバル人材育成推進事業の一貫として、実践的な海外派遣プログラムを作ることを目指し、2012年12月から独自にプログラムの開発を始め、2013年8月に第1回プログラムをシンガポールとタイの両国で実施することにこぎつけた。本プログラムは「海外探検隊」と名づけた。未知の世界に挑戦する南極探検隊と、国際協力を行う海外青年協力隊にイメージを重ねてのネーミングである。プログラムの派遣国や実績等は後述するが、特筆しておきたいのは、本プログラムは最初から正式科目として単位化したことである（2単位）。科目名は海外派遣キャリア演習というが、学生が本プログラムに2度参加できるように、海外派遣キャリア演習ⅠとⅡを設置した。正式科目として単位化したことは、本学のグローバル化推進への強い志の表れであったと考えている。

## 海外探検隊

#### 3.1 プログラムの派遣実績

以下、2015年8月現在の実績である。5期生までで、延べ70名（学部1～4年生）を派遣している。

- 1期生（2013年8月実施）シンガポール、タイ 12名派遣
- 2期生（2014年3月実施）シンガポール、タイ 8名派遣
- 3期生（2014年8月実施）シンガポール、タイ、香港、台湾 14名派遣
- 4期生（2015年3月実施）シンガポール、タイ、香港、台湾、マレーシア 21名派遣
- 5期生（2015年8月実施）シンガポール、香港、台湾、マレーシア 15名派遣



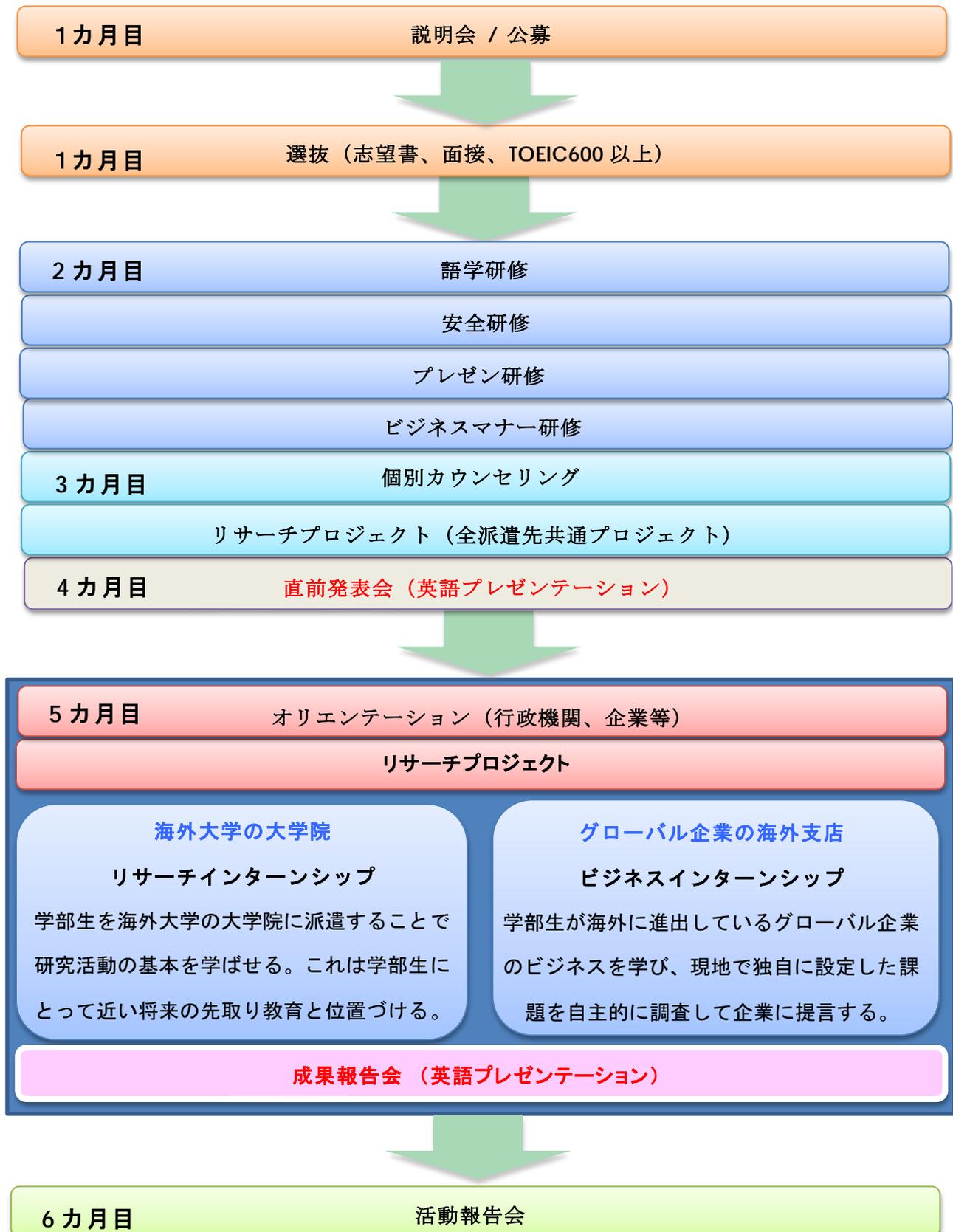
#### アジア5か国・地域

- 香港
- 台湾
- タイ
- マレーシア
- シンガポール

\* マレーシアは、東マレーシアのコタキナバルに派遣

### 3.2 プログラム全体の流れ

海外探検隊プログラムは、参加する学生を募集する説明会から帰国後の活動報告会まで、6 か月をかけて実施する海外派遣プログラムである。以下がその主な流れである。



以上が、大まかな流れであるが、この中でも渡航前研修は特に大切なため、ここでもう少し詳しく説明することにしよう。

### 3.2.1 国内で実施する渡航前研修

例えば8月に海外派遣する学生達の選抜の場合、4月から募集を開始し、5月の連休明けには募集を締め切り、選考を実施する。そして5月中旬には派遣対象者を選抜して、それから派遣までの約3カ月間、国内で事前研修を実施している。その主な内容は以下の通り。

- ① 語学レッスン（タイ語、中国語、マレー語 90分・各10回）
- ② 安全対策研修（60分・1回）
- ③ プレゼン研修、直前発表会（90分・全6回）
- ④ ビジネスマナー研修（90分・1回）
- ⑤ 個別カウンセリング（カウンセラー個別面談・1人50分）
- ⑥ リサーチプロジェクト（派遣国共通のリサーチプロジェクト、テーマ例：魚の販売方法調査、ドラッグストア調査等）



直前発表会

渡航前研修をしっかりと受けさせることは、チームメンバーが親しくなるためのきっかけ作りであるのに加えて、様々なスキルを身につける機会となる。現地でお世話になる方々への挨拶メールを学生たちが書くが、その添削はプログラムの担当教員が個別に添削する。

こうした一つ一つの学生とのやり取りを通して、教員と学生の間で信頼関係を築き、学生たちには自分たちが大学を代表して、もしくは日本の大学生を代表してプログラムに参加していることを理解させる。また、1カ月の集団生活を海外で一緒に行う仲間達ともこの研修の機会を通してコミュニケーションを取り、事前にお互いの特徴や性格を知っておくことも大切である。

## 3.3 アジアの一流大学との連携

### 3.3.1 世界ランク上位の大学をパートナーに

さて東京海洋大学において新たに本格的な海外プログラムを作る構想をたてたとき、私が最も重視したことは、「強力な海外大学のパートナーを得ること」であった。これまでの海外協定校は、本学の教員が研究交流を行っている海洋研究に力を入れた単科大学が多く、そうした専門性の高い大学との交流には多くの学術的なメリットはあるものの、今回の海外プログラムを設計するには、もう少し大

きなビジョンでパートナー選びを検討する必要があった。

その結果、海外のパートナー大学には海洋研究の単科大学ではなく、世界で評価を高めているアジア各国のトップレベルにある総合大学に狙いを定めることにした。尚、海外プログラムを設計するにあたり、アジア圏で実施することにした理由は、主に以下の3つである。

- ① 日本とアジアの関係はより一層重要さを増しており、未来を担う学生たちにアジア体験やアジア人脈を持たせること、そしてアジアへの文化理解があることは、将来の職業人生において大きな財産となることと考えたから。
- ② アジア圏は日本との時差が少なく、距離も近く、また大きな日本人社会も存在し、海外への渡航が初めてという学生にとっても比較的 안전한派遣先になること、そして緊急対応の面でも安心であること、また物価が比較的安く、予算内で充実したプログラム設計ができると考えたから。
- ③ アジア各国は日本への関心が高く、成長著しいアジアの一流大学もその点では例外ではなく、様々な協力体制が作りやすいこと、またアジアには豊富な自然（特に海洋資源）があり、本学の学生にとって多くの学習テーマがあること

以上を踏まえ、以下の5大学を本プログラムの海外パートナーとすることを決めた。シンガポール国立大学、香港大学、台湾大学、そしてマレーシアサバ大学の4校とは、海外探検隊プログラムの実施を機会に国際交流協定、さらには学生交流協定（シンガポール国立大学は除く）を結ぶに至った。

- \* シンガポール国立大学熱帯海洋科学研究所
- \* チュラロンコン大学理学部食品科学学科
- \* 香港大学太古海洋科学研究所
- \* 台湾大学海洋研究所
- \* マレーシアサバ大学熱帯生物多様性保全研究所

海外の大学との交流パターンはいくつか異なる方法を試行しているが、その代表的な内容をいくつか紹介することにしよう。

### 3.3.2 日本に関心の高い学生とのパディシステム

まず、タイのチュラロンコン大学のケースを例にとりあげる。タイへの派遣が決まった学生4名は、約2カ月の国内の事前研修を終えた後、チュラロンコン大学理学部食品科学学科の学生4名とともに、同国シラチャのアマタシティ工業団地内にある4つの日系企業の工場にて、工場実習に参加した。タイ人学生達に共通していたことは、日本に対する関心がとても高いことであり、日本人との交流を求

めていた点である。

そうしたタイ人4名と日本人学生が、それぞれ1名ずつ、4つの2人ペアのチームを作り、バンコク郊外、約1時間半に位置するアマタシティ工業団地内にある4つの日系企業（リコー、ダイキン工業、住友ゴム、三桜工業）の製造現場に派遣され、業務改善プロジェクトに取り組んだ。日タイの学生達によるペアのバディーシステムは、双方にとって大きなプラスをもたらした。

一例として、たとえば日本人学生は会社の日本人幹部社員と日本語で深い話ができるが、製造現場にいるタイ語しかわからないスタッフとの会話が成り立たない。タイ人学生は、英語が十分に話せない日本人幹部社員とのコミュニケーションに限界を感じていた。そこで日本人学生とタイ人学生は、それぞれが満たされない部分を補うために、お互いにとって共通な「英語」を使って、様々な情報共有をするようになり、その結果、学生二人の信頼関係が深まるという、よき副産物を得ることができたのである。本プログラムは英語習得が目的ではなく、異文化理解であり、英語が苦手な学生でも様々な体験を積むことで、自分が変わるきっかけを掴むことができることが、よくわかる事例である。

シラチャでの工場実習を終えた学生達はバンコクに戻り、残りの約2週間でチュラロンコン大学食品科学学科で過ごす。ここでは様々な実習に参加する。滞在中はチュラロンコン大学学生寮に滞在し、キャンパスライフを満喫し、さらにタイ人学生とのネットワークを広げることができる。



タイ人パートナーと



タイ人と一緒に働いた経験は一生もの



タイ人パートナーと成果報告会を実施

### 3.3.3 グローバル企業で行うインターンシップ、調査活動について

さて、次にシンガポールで行ったフィールドリサーチ型プロジェクトについて紹介したい。学生達は、1カ月間の海外滞在中に4つの企業（ジョンソンアンドジョンソン、伊藤忠商事、富士ゼロックス、ゼニライトバイ等）から与えられた課題解決に取り組んだ。

たとえば、化粧品を開発するジョンソンアンドジョンソンの研究所からの課題は、「シンガポールで売れそうな新しい紫外線防止商品を提案してください」というシンプルな課題であった。課題に取り組み始めてから1週間後には、全ての会社にて企業の幹部社員向けのプレゼンテーションの機会が用意されている。学生達は社会人の期待にこたえるために、シンガポールのパートナー大学であるシンガポール国立大学や南洋工科大学のキャンパスを訪れて、現地の学生や教職員を相手に地道なアンケート調査やグループインタビューを実施した。実際、学生達が最終的な提言をプレゼンする相手が研究開発部門の研究者から部門長までであったように、学生インターンシップであるとはいえ、それぞれの会社にとっても利用価値のある情報提供をすることを目指した。

また、伊藤忠商事シンガポールの事例では、同社がシンガポール人学生の新卒採用を始めることを検討していたため、シンガポール人学生の就職意識調査を行うことを提案し、それが了承された。学生達は、ここでもシンガポールのトップ校であるシンガポール国立大学と南洋工科大学に訪問し、シンガポール人学生へのアンケートを実施した。学内で開催されているキャリアフェアにも参加して、グローバル企業の新卒採用の手法を調査した。その結果をもとに新卒採用に関する学生視点からの提言を伊藤忠商事シンガポールに対して行ったのである。その報告会には、同社の副社長の参加もあったほど、学生達の一連の活動は業務に対する貢献度が大きいとして注目して頂いた。



副社長も報告会に出席



海図の読み方をプロから指南



香港味の素グループにて

### 3.3.4 大学院の研究室でリサーチインターンシップ

次に、台湾大学海洋研究所と合同で行う取組みについて紹介したい。台湾大学海洋研究所は大学院に所属しており、学部生はいない。つまり、本学の学部生は、海外のトップ大学、それも大学院レベルの研究室に所属し、研究のお手伝いをさせて頂く機会を得ている。まず渡航前に、お世話になる4つの研究室の詳細の情報を頂き、派遣予定の学生たちが協議して、自分がより関心のある研究テーマを持つ研究室をそれぞれが選ぶ。

その上で、研究室が発行する論文を2本読み、その感想を現地の研究室にレポートする。

現地に到着した後、4名の学生たちは一人ずつ、自分が所属する研究室に配属されて1週間、研究生活をする。本学では4割の学生が大学院に進学するため、研究志向の強い学生が多く、ここで体験するリサーチインターンシップは、来るべき研究活動の先取り教育となり、学生たちからは大変好評である。では次に、いかに学生達を海外で安全に過ごさせるか、いわゆる海外派遣プログラムの安全対策について紹介したい。



台湾大学海洋研究所にて

### 3.4 オールジャパンの社会連携でリスクを最小限にする

海外で大学生が1カ月過ごすことには、様々な予期せぬリスクが想定される。もちろん、出国前に海外医療保険に入ることや、安全対策のセミナーを行うことも大切である。しかし、海外で万が一、本当に何かトラブルが起こった際には、瞬時の早い対応が必要なことが多く、日本からのサポートだけではタイミングを逸してしまう場合がある。

これを解決するには、現地事情に詳しく、信頼できて頼りになるサポーターの存在が必要であり、その鍵となるのは海外にある日本人社会の存在である。このため、海外派遣プログラムを成功させるためには、プログラム担当教員自らが現地在住の日本人駐在員とネットワークを築くことが大切であり、折に触れて学生達の滞在について広く知らせておく必要がある。

また、現地で入国直後に行うオリエンテーションでは、意識的に各種政府関係機関を訪問することを徹底している。例えば、日本国大使館、日本商工会議所、日本人会などの公的な機関である。その他にも現地に進出している日系の民間企業、そして個別の人脈で独自に開拓した現地在住の日本人ビジネスマンの存在も大きい。毎回、プログラムが始まる最初のオリエンテーションの際に、担当教員が学生に同行して現地サポーターの方々と一緒に訪問することが、海外派遣プログラムを実施する際の安全対策の鍵である。

### 3.5 成果報告会のあり方

1カ月の海外滞在の最終目標は、帰国直前に現地できり行う成果報告会を成功させることである。これは学生達が1カ月の間に何をしたか、何に気づいたかについて、お世話になった現地の行政機関、民間企業、協力者、そしてメンターとなってくださったビジネスマンの方々に対して、詳細の報告をする場と位置づけている。もちろん、これは日本人だけが相手ではなく、現地でお世話になった大学教員や学生、そして社会人の方々すべてを含む。

1カ月の最後に成果報告会が予定されていることで、学生達には滞在中に一貫して適度な緊張をもたらすことができる。また、学生達も他の仲間達の活動や気づきを聞くこともできる。なんと言っても1カ月の努力と成果を可視化させることができることは、学生たちの自信にもつながり、大きな教育的効果があると考えている。

成果報告会には、約30名の行政官や大学関係者、そしてビジネスマンが集まってくれるが、そこには外国人の方も当然含まれているため、成果報告は全て「英語」で行われる。成果報告会は約2時間で行われるが、その舞台の選択がとても重要である。学生達をより大きな舞台に立たせることによって、学生たちは自分たちが過ごした1カ月の重みを十分に実感してくれるものとする。

#### 3.5.1 成果報告会の会場について

- 香港 : 香港日本人倶楽部
- 台湾 : 交流協会台北事務所
- タイ : 在タイ日本国大使館
- マレーシア : サバ州政府観光局
- シンガポール : 理化学研究所シンガポール事務所

\*2015年3月の実績から



理化学研究所シンガポール事務所にて



サバ州政府観光局にて



交流協会台北事務所にて



在タイ日本国大使館にて



香港日本人倶楽部にて

### 3.5.2 成果報告会の流れについて

成果報告会は、海外派遣プログラムのハイライトであり、多くの協力者を迎えて行うため、大学教育の成果を白日の下にさらすことになる。成果報告会自体は学生主体で運営するが、教職員が影となって、その成功を下支えすることは言うまでもない。

以下に紹介するのは、2015年8月に実施予定の海外探検隊5期生が行う成果報告会の流れである。本年度はシンガポールが建国50周年を祝う特別な年でもあり、国を上げて祝うSG50というイベントについて考察し、学生たちの視点で見たシンガポールを報告させる。

#### 事例：シンガポール5期生の成果報告会

- 14:00 - 15:30 会場設営
- 15:30 - 16:00 受付開始、16:00 スタート
- 16:00 - 16:05 挨拶（担当教員）
- 16:05 - 16:20 SG50 プロジェクトの成果
- 16:20 - 16:35 ゼニライトバイ、フィッシュファーム
- 16:35 - 16:50 NUS マリンプロジェクトの成果
- 16:50 - 17:00 休憩
- 17:00 - 17:15 JST サイエンスプロジェクトの成果
- 17:15 - 17:30 JST フィードバック、質疑応答
- 17:30 - 17:45 シンガポール生活と気づき
- 17:45 - 17:50 挨拶（担当教員）
- 17:50 - 18:00 「感謝の会」会場へ移動

### 3.6 教職員の同行について

前述のとおり、成果報告会は全て学生主体で企画・運営する。自分たちで作り上げたものであるという実感を学生達が持てるよう、担当教員は側面からのサポートを心がけることが重要である。成果報告会には、担当教員をはじめ、日本からも応援スタッフとして教職員が参加し、学生達をサポートする。この活動は、学内に置けるファカルティディベロップメント (FD)、そしてスタッフディベロップメント (SD) 活動の一環と位置づけている。

実際、過去の成果報告会には、教職員に加え、副学長などの管理職も日本から駆けつけて学生達の成果を見届けたが、そうした試みを行うことで学内の執行部や教員から本プログラムへの理解を高め、さらなるサポートを得ることも、安定的に海外派遣プログラム継続を続けるためには重要と考える。

尚、成果報告会を終了した後は、学生達がお世話になった方々をもてなす「感謝の会」を催すことにしている。こちらも成果報告会と同様、学生が企画・運営をする。手作りの感謝カードをはじめ、学生達の海外生活の写真をスライドショーで見せるなど、1カ月の滞在への別れを惜しみつつ、会場は暖かく感動的な雰囲気にも包まれることになる。様々な苦労と一緒に乗り越えた同じ釜の飯を食べた仲間達の努力をお互いにたたえ合う学生達の姿には、協力してくださった多くの社会人の方々からも「とてもいい刺激になった」「協力してよかった」という声が集まっている。

参考までに、以下に同行した教職員のスケジュールを紹介する。3泊4日の旅程である。

#### 事例：マレーシア5期生の同行スケジュール

学生：4名      同行者：4名（教員1、職員1、担当職員1、担当教員1）

8月26日（水）    コタキナバルに到着、ホテルチェックイン

8月27日（木）    8:00 - 10:00 ホテルロビー集合、魚市場視察

10:30 - 11:30 ヤンマー訪問

13:00 - 15:00 マレーシアサバ大学訪問（熱帯生物多様性保全研究所）

20:00 - 22:00 学生指導

8月28日（金）

8:00 - 9:00    ホテルロビー集合

11:00 - 12:00 コタキナバル日本人小学校出張授業のサポート

14:30 - 15:30 サバ州観光局に到着（学生と合流）

16:00 - 18:00 成果報告会（サバ州観光局）

18:00 - 20:00 感謝の会

8月29日（土） 帰国日

早朝ホテルをチェックアウト、空港へ

### 3.7 帰国後の報告会と後輩への引き継ぎ

さて、1カ月の充実した海外派遣プログラムを終了した学生達は、日本に帰国した後、通常の学生生活に戻る。中には、刺激的だった海外生活から平凡な日本の日々に戻り、一気にそのギャップに落ち込む者も生まれる心配もあることから、帰国直後から順次、様々な報告会と新たな活動の機会を作るように配慮している。

#### 3.7.1 帰国後の活動報告会

帰国してちょうど1カ月後に行う活動報告会には、海外探検隊の活動に関心がある学生、参加した学生の保護者、外部協力者、教職員を招待し、参加したすべての派遣国での活動を報告している。

学生たちは、プログラムを終了したことへの自信にみなぎっており、毎回非常に充実した報告会となっている。

一方、帰国して通常の生活に戻った学生たちの中には、充実した海外生活から平凡な日本の生活に戻り、一種の喪失感を感じているものもいるが、この活動報告会は、今後、学生たちが自主的に学びの機会を増やすことによって、日本での生活をさらに充実させるための決起集会のような意味合いも持たせている。自分が知らない国に行って、同年代の仲間たちが頑張った様子を見ることができた学生たちは、活動報告会を終えた後は再度奮起して、新しい挑戦に一步を踏み出していく。



1カ月のプログラムを終えて

#### 3.7.2 海外派遣に挑戦する学生のリクルートメント

もう一つ重視しているのは、帰国後の学生には、次期派遣生の採用に深く関わってもらうことである。具体的には、帰国間もない学生達に、次回派遣される学生たちの新規募集の説明会に参加してもらい、自分たちの生の体験を話してもらっている。次期派遣生が確定した後は、「引き継ぎ」と称して、1カ月のプログラムに参加した体験の具体的内容を学生達同士でしっかりと話し合ってもらい、OB/OGのノウハウを後輩達に引き継ぐことを徹底している。

幸いにも、学生達はこうした一連の報告会や引き継ぎに大変前向きに参加してくれるため、本プログラムには互助組織的なカルチャーが育ちつつあり、この良き伝統を今後も継続していきたいと考えている。また言うまでもないが、大学を卒業した学生についても、いずれは自らが海外駐在をした際などに後輩の学生達の受け入れ先企業になり、海外にいて後輩たちのメンターとして協力してくれることも期待できる。詳しくは後述するが、海外探検隊OB/OG同窓会の組織化を始めている。

### 3.7.3 学内の国際業務への貢献

大学には、定期的に海外から来客がある。海外大学の提携校やこれから交流が期待できる大学の学長や教授たち、そして各国の政府関係者や大使館からVIPが来学することも少なくない。そうした機会に海外探検隊の学生はたびたび動員され、学生代表として本学に来学した方をもてなす役割を担う。言わば、海外探検隊のOB/OGは、学生大使であり、学内の国際業務の学生請負集団である。これは教育的観点からも学生たちの自主性を育てる効果があり、学生も母校に貢献できることを誇りに感じている。また、こうした一連の行動は、学内のほかの学生にもポジティブな影響をもたらしている。



ノルウェー水産省副大臣に同行



南洋工科大学日本愛好会の学生が来日



シンガポール国立大学の研究員が来日



外務省 JENESYS プログラムで来日した台湾の大学生と交流

### 3.7.4 グローバル教育の研究活動への貢献

海外探検隊プログラムは、2015年7月までに3度、グローバル人材育成教育学会で学生発表の場を得ている。海外派遣プログラムに参加して学生が何を学んだか、学生はどのようなプログラムを望んでいるか、グローバル教育の研究者に対し、リアルな情報提供をしてきた。また、帰国後の海外探検隊のOB/OGは、グローバル教育の実践



学会で学生発表を披露

に関心が高い者も多く、研究活動への継続した貢献が期待できる。

### 3.7.5 産学連携への貢献

海外探検隊のOB/OGにとって、プログラムに参加して一番刺激になったのは、現地で豊富に経験した社会人交流だったという学生が多い。この部分を日本に帰った後に学生だけで継続するのは難易度が高いため、担当教員がグローバルキャリア研究会（通称、グロケン）を主宰し、社会人と学生が交流する状況を継続して提供している。



社会人と一緒に討論

具体的には、2カ月に一度、社会人に専門的なテーマで話題提供をしてもらい、その内容について社会人と学生と一緒に討論を行っている。大学教育の現場と企業人が距離を縮める活動でもあり、毎回多数の企業人が参加してくれることで、本学の学生は成長の機会を得ている。本研究会に帰国後の海外探検隊のOB/OGが参加することで、学生たちは産学連携にも貢献している。

### 3.7.6 高大連携、入試広報への貢献

グローバル教育は、高大連携も実現するという例を紹介したい。文部科学省のスーパーグローバルハイスクール（SGH）構想を受けて、高校の現場にもグローバル教育の導入が進んでいる。ユニークな海外派遣プログラムを実施する本学に注目した全国の高校からの視察が増えているが、その中にはSGHやSGHアソシエイト指定を受けた高校が目立つようになってきた。海外探検隊のOB/OGは、大学のグローバル化をアピールすることに大変重要な役割を果たしている。



SGHアソシエイト校が来学

### 3.7.7 海外探検隊OB/OGを同窓会に組織化

5期生までで延べ70名の学生が海外探検隊プログラムに参加したことになる。すでに大学を卒業した者もいるが、今後、毎年、数十名単位で新たなプログラム体験者が生まれること、また社会人のOB/OGが増えることを想定し、同窓会として組織化した。これは大学として中長期にわたり産学連携を深めることに大きな意味を持つと考えており、また学生たちにとっても、ここで得た貴重な人脈は将来にわたり有効であると考え。第1回の同窓会は、2015年9月30日に実施を予定しており、以後、毎

年1回、同時期に本学品川キャンパス内で実施する予定である。

### 3.7.8 広報について

海外探検隊プログラムに関する詳細の情報は、以下の2つの広報手段で実態を詳しく伝えている。関心のある方には是非参考にして頂きたい。

ホームページ <http://www.kaiyodaiglobal.com/abroad/>

#### 海外探検隊 (グローバル人材育成推進室立案型)

- [プログラム概要](#)
- [応募情報](#)
- [学生体験記](#)
- [派遣先企業からの声](#)
- [各国のプレゼン資料](#)
- [渡航前研修](#)
  - [ローカル言語](#)
  - [ビジネスマナー](#)
  - [プレゼンテーション](#)
  - [危機管理](#)
  - [プロジェクト](#)
- [現地成果報告会](#)
- [活動報告会](#)
- [帰国後の活動](#)
  - [海外訪問留学生交流](#)

#### 海外探検隊コモンウェルス

海外探検隊コモンウェルスとは、2015年に新たに開発される、旧英国連邦4か国(カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、英国)の英語圏への研究室留学(1か月)プログラムです。

#### 指導教員立案型

		
食品生産科学科4年 <a href="#">日笠 睦実</a>	食品生産科学科4年 <a href="#">佐保 舞花</a>	海洋生物資源学科4年 <a href="#">渡邊 証</a>

#### サポート体制

- [差水会からの支援](#)
- [学内のグローバル教育](#)
- [学外のグローバル教育](#)

FAO  
各種申込  
グローバルコモン  
TOP

## WEB CATALOG

Clickするとカタログが見られます!



海外探検隊 Vol.4

click here



海外探検隊 Vol.3

click here



海外探検隊 Vol.2

click here



海外探検隊 Vol.1

click here

<http://www.kaiyodaiglobal.com/ebook/> (印刷媒体もあり)

### 3.8 海外パートナー大学を日本へ招聘する

海外探検隊プログラムは、アジア5カ国にメインのパートナー大学が5校ある。2015年8月の派遣で5期生を迎えるが、これまでの交流は、日本人学生がアジアを訪問した際に行うことが中心であり、残念ながら、それぞれの国から日本に学生を受け入れる機会はなかった。この不均衡をいつか解消したいと思い、その具体的な方法を模索してきたが、プログラム実施3年目を迎え、その思いが現実化することになった。

## EAST program

科学技術振興機構（JST）が実施する日本・アジア青少年サイエンス交流事業に、2015年7月に採択されたのである。この事業に採択されたことで得られる資金を活用して、アジア5カ国から合計10名（各国2名ずつ）のアジア学生を1週間、日本に招聘することができたのである。早速このニュースを現地地で世話になる各大学に連絡したところ、各地から歓迎の声が上がった。

海外探検隊プログラムはアジアで実施するプログラムであるが、ついにアジア5カ国のパートナー大学すべてを巻き込んだ形で、日本でも実施することができたのである。1週間の招聘は「学生による学生のための環境授業の実践～環境教育学生会議2015」(Environmental Awareness Student Training Program 2015)、略して EAST program (イーストプログラム)と命名した。

プログラムの具体的な内容であるが、アジア5カ国のパートナー大学のアジア学生に東京海洋大学海外探検隊OB/OGの学生たちが一緒になって混合チームを5つ作り、チームごとに高校生向けの環境教育を設計し、それを実際に日本のサイエンススクールに出向いて高校生向けに出張授業を行うというプランである。

興味深いフィールドワークも用意した。環境教育を設計するための題材を探すために、東京海洋大学が所有する船に乗って東京の運河や河川を巡って調査を実施するのだ。そして日本で実践した高校生向けの環境教育は、アジア学生が本国に戻った後にも、必ず一度は本国の高校で同内容の出張授業を行うことを義務づける。今回5つの混合学生チームが作った環境教育の中身は、参加者全員の財産とすることで、今後もアジア各地で大学生による高等学校教育の現場に対する環境教育の実践にプログラムを活用する。海外探検隊としては、今回アジア学生と一緒に開発した環境教育プログラムを使って、今後は大学生による全国の高等学校における出張授業を行うことを計画している。以下、具体的な構想を紹介する

#### Environmental Awareness Student Training Program 2015 (EAST program)

Raising Environmental Awareness to Secondary school students by University students

Period : From October 25<sup>th</sup> 2015 till November 1<sup>st</sup> 2015 (8 Days, 7 Nights)

Japanese name: 環境教育学生会議 2015  
学生による学生のための環境授業の実践

Host University: Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT)

Supported by: TANKENTAI Alumni – Overseas Career Training Program

Partner Universities: 1) Hong Kong University  
2) National Taiwan University  
3) Chulalongkorn University  
4) University of Malaysia Sabah  
5) National University of Singapore

## INITIATIVE

Raising environmental awareness to the young generation will give a positive impact on environmental conservation. Students from 6 Asian top universities in environmental studies will create Environmental Sustainable Development Program for Secondary School education in Asia in order to promote the importance of biological diversity.

## APPROACH

Creative programs produced by Asian students will raise the environmental awareness among the Asian Secondary Schools. A mixed team of Asian students will have a chance to give lecture at one of the well-recognized secondary School in Tokyo. Asian students will bring back the programs to their home country and give lecture to local schools too.

Programs produced by students will become the asset of entire group and encouraged to be utilized within the region for educational purposes.

## 4 まとめ

海外派遣プログラムを設計する際の創意工夫であるが、物事をすべて自前で行うことは望ましくなく、また業者に丸投げするのもお勧めできない。まずは現地に有力なパートナー大学を選定して、一緒にプログラムに取り組むことが大切である。当然のことながら、相手は地元の情報や人脈に精通しており、安全管理、緊急対応の面、そして現地でグローバル企業や行政機関からの協力を得る際も、現地の大学との共同プロジェクトにした方が、はるかに協力を得やすくなることは事実である。

同世代である現地の学生との交流は、日本の学生にとって大きな財産となる。特にアジアにおいては、幸いにも現地学生の日本への関心がとても高いため、二国間の学生交流が成功する可能性は高い。

海外派遣プログラムの独自設計は難易度が高いイメージがつきまとうが、現地に通り詰めて協力者との人間関係を築くことが、すべての基本となる。安全管理や緊急対応の心配も常にあるが、十分な対策を講じれば、リスクは最小限に抑えることもできる。

海外派遣プログラムは、グローバル人材の育成における教育効果が飛躍的に高いため、多くの高等教育機関でその実施を前向きに検討し、今後もその教育手法についてさらなる研究が進み、研究者間の情報交流も深まることを期待したい。本学では、教育機関からの視察や問い合わせを歓迎しているため、気軽に連絡頂きたい。

連絡先 tkomat0@kaiyodai.ac.jp

参考リンク

<http://www.kaiyodaiglobal.com/abroad/>

## 私の東京大学 FLY Program 体験談

### Three Cases of Freshers' Leave Year Program

東京大学文科1類2年 山田 智子

東京大学文科2類1年 坪田 大河

東京大学文科3類1年 山口 集

YAMADA Tomoko (Undergraduate Student, The University of Tokyo)

TSUBOTA Taiga (Undergraduate Student, The University of Tokyo)

YAMAGUCHI Atsumu (Undergraduate Student, The University of Tokyo)

キーワード：ギャップイヤー、バックパッカー、海外留学

#### 一年間大学から離れて学んだこと What we learned in a year without the university

<東京大学文科1類2年 山田 智子>

##### 前例のないプログラム

FLY Program は、私の東京大学への入学が決まった2013年の春から導入された、日本では前例のないプログラムだった。秋入学制度を取り入れる前段階として東京大学が新たに設けた、欧米の大学では既に普及している「ギャップイヤー」に準じた制度である。ゆえにこのプログラムは通常の交換留学などとは異なり、休学する一年間の計画は全て学生本人が立てる。私はこのプログラムを利用し、2013年の7月から2014年の3月までカナダのトロントで活動を行った。

##### 活動の概要

ここで私の一年間の活動の概要を紹介する。2013年7月までは活動の計画と渡加準備、7月に渡加、語学学校に通い始めると同時にホームステイを行い、9月からボランティアを開始、10月に学校を卒業し、ホームステイを終了してシェアハウスに移り住んでアルバイトを行い、2月後半から北米西海岸を旅行し3月初旬に帰国した。

##### 語学学校での日々

私がトロントへ来て最初に行った活動が3カ月間の語学学校での英語の勉強だった。私が学校に通おうと思ったのはもちろん自分の英語力を伸ばしたかったからということもあるが、語学学校には世

界各国から生徒が集まってくるため、英語圏以外の国の友達を作り様々な文化を学ぶいい機会になると思ったから、というのもあった。その目的通り、毎日世界各国のクラスメートと共に英語を学ぶのはとても楽しい体験で、母国語や自国で受けてきた英語教育によって英語のどの点に難しさを感じるかが異なるというのは面白い発見であったし、様々な文化的差異を感じる事ができた。例えば日本人や韓国人は複雑な単語を覚えることに苦労するが、南米人は複雑な単語の場合、母国語と似た単語であるため覚えやすいようで、逆に一見簡単そうに見える句動詞に苦労していた。語学学校で過ごした3カ月は、誰も知り合いのいない異国の地での初めての友達作りの機会、そして初めての海外生活の初めの一歩となり、その後の私のトロントでの生活の基礎を作ったと思う。

### 海外でのアルバイト

私の活動の一番の目的は、英語圏で英語を使ってアルバイトに挑戦することであった。日本でのアルバイトの経験はほぼなかったが、仕事をする事で学べることは多くあるだろうと考えたため、ワーキングホリデービザを取得し、語学学校終了後にいくつかのアルバイトを行った。ここでは私のカナダでの生活の中で最も強く印象に残っている、初めてのアルバイトの経験について述べたいと思う。

仕事探しはレジュメの作成から始まった。語学学校の先生の助けを借りつつ、英文で自己アピールを盛り込んだ履歴書を作成した。カナダで仕事を手にするための方法はいくつかあるが、一番の主流が、街を歩き、自分の興味のある店に入って店長か従業員に直接レジュメを手渡すという方法である。そこで私も作成したレジュメを持って9月の終盤から街を歩き始めた。しかし初めのうちは店に入るのさえ勇気が要り、まして店員に話しかけてレジュメを渡すことなど全くできず、店の前を通り過ぎることしかできない日が続いた。もともと日本にいても人見知りをしてしまうため人に話しかけるのが苦手であるうえに、自分の英語力に自信がなかったため、このレジュメ配りの方法は私にとってかなり厳しいものだった。しかし自分にとって難しいことであればあるほど自分の成長に繋がるだろうと信じていたため私はどうしてもこの方法でレジュメ配りを成功させたいと思っていた。周囲の人の励ましもあり、10月のある日ようやくカフェに入店しレジュメを従業員に渡すことができた。その日はこの活動全体から見ても自分自身が大きく成長した瞬間のうちの1つであったと思う。しかしその後も順調というわけではなく、日によっては勇気が出ずに何時間も外を歩き回った挙句1件しか入店できない日もあった。また、やっとの思いでレジュメを手渡してもよい返事が返ってくる店はほとんどなく、1カ月ほど、このままずっと仕事が見つからないのではないかという不安に苛まれ続けた。仕事探しも試行錯誤し、ようやく手にした面接の機会が、私の人生初めてのアルバイト先となったTim Hortonsでのものだった。

Tim Hortonsはカナダの大手チェーンのドーナツ屋で、街を歩いていけば店のロゴの入ったコーヒークップを持っている人ばかりというほどの人気店だ。初めての仕事の面接はとても緊張したが、自

分にとって満足のいくものとなり、数日後、私は晴れて人生初の仕事を手にした。その時の喜びは仕事探しにとっても苦勞した分、何にも代えがたいものだった。しかし残念ながら仕事は順調には行かなかったのである。結局私はそんなにも苦勞して得た仕事を2週間半で辞めてしまった。理由は一つではないが、あまりに忙しくプレッシャーの多い仕事だったため精神的に辛く、続けられる気がしなくなったというのが一番の理由であったように思う。英語が不自由であることから来るフラストレーションも辛さの原因となっていた。仕事中に泣きたくることが何度もあったが、それでもこの仕事は自分が時に悔し涙を流しながらやっと得た仕事であったため辞めたくはなかった。最終的に辞めるという決断をしたのは、それぞれの人に個性があるように人には向き不向きがあるのだから、自分にはこの仕事は向いていないのだと認めることも必要なのではないか、自分が少しでも活躍できる場のある仕事をもう一度探してみようという気持ちになったからであった。一度自力で仕事を掴んだ経験が私自身を強くしたのか、次の仕事もきっと見つかると思われたいのは一つの成長であったと思う。短い間ではあったが、自分にとっては相当辛かった仕事をしたことで学んだことは多くあった。給料には満足していても自分が楽しいと思えたり達成感を感じられたりする仕事でなければ私は続けることができないということや、共に働く人や仕事場の環境が仕事を長く続けるためには重要であるということなど、そこで学んだことは、アルバイトに留まらず私の将来の仕事選びや進路の選択の際にも自分の基準として生きてくるだろう。Tim Hortonsでの経験は大きな成功と挫折の一つとして私の中に強烈に刻み込まれた。

### FLY Program 修了後1年半を過ごして

一年間の休学期間を終えて、現在大学へ戻ってから1年半が経過しようとしているが、FLY Program 期間中の経験が自分を変えたと気づく場面は数多くあった。カナダの保育園で働いて子供たちと接したことをきっかけに、自分も子供が欲しいという思いが強くなり、以前は何よりも自分のキャリアを重視して将来の仕事を選びたいと思っていたが、今では子供を持って続けられるような仕事がしたいと考えるようになった。進学についても、カナダでの就労の経験から、専門的な知識が必要とされる仕事に就き、自分にしかできない仕事をしてやりがいを感じたいと思うようになったため、法律を自分の専門としていく決心がついた。

高校からそのまま大学に進学し、大学生活を過ごしていただいただけでは生じなかったであろう考え方の変化が、カナダで過ごした8カ月の間にあったように思う。FLY Programの一年はこれからも私の人生において重要な意味を持ち続けるだろう。

**バックパッカーとなって経験値をためる A great growth as a backpacker**

<東京大学文科2類1年 坪田 大河>

**バックパッカー大学生**

「大学入学直後にして休学し、バックパッカーとなって海外を転々としていた大学生」と聞いて、みなさんはどのような人物を思い浮かべるでしょうか。多くの方は、さぞ海外慣れした大学生なのだろうな、肝のすわった堂々とした大学生なのだろうな、といった第一印象を抱くのではないのでしょうか。私はまさに、「大学入学直後にして休学し、バックパッカーとなって海外を転々としていた大学生」であるわけですが、バックパッカーをする前は、海外で一人旅などしたこともなく(行ったことがあるのはアメリカだけですが、それは中学の短期留学のプログラムでのことです)、堂々としている大学生でもありませんでした。

はじめて海外一人旅をした国は、中国でした。飛行機で北京に降り立ったときに、僕を襲ってきたぞわぞわとした不安は、いまでもありありと蘇ってきます。旅でなによりも心配なのは、「空港からホテルまでちゃんとたどり着けるのか」ということに尽きます。僕は地下鉄を乗り継いで空港からホテルへ向かうと決めていましたし、地下鉄の乗り換えも調べていた上、ホテルの最寄り駅周辺の地図の印刷まで済ませてあったのですが、それでも不安はつの一方向です。

スリに遭わないか、強盗に遭わないか、麻薬を混入されないか・・・(中国では麻薬の所持は即死刑です。どんな理由であっても、外国人であっても、です)、不安は山ほどあります。さいわい、その日の空港からの乗り継ぎはうまくいき、宿泊施設にも無事にたどり着くことができました。

あとで知りましたが、バックパッカー界隈では、はじめての一人旅に中国は向かないそうです。というのも、中国では英語がほとんど通じないからです。実際、上海のコンビニで、店員にホテルがどこにあるかと尋ねたとき、hotel という英単語すら通じなかったのには、ショックをうけました。

やはり何事も、実行する前が一番勇気を要するものです。中国、東南アジア(シンガポール、マレーシア、ブルネイ、タイ、カンボジア、ベトナム、ラオス)、中欧(イタリア、スロベニア、クロアチア、ハンガリー、スロバキア、オーストリア、チェコ、ドイツ、ポーランド、トルコ)とかなり国々を訪れたあとから振り返ってみると、旅行の準備をしていた頃が一番不安と緊張を感じていたように思います。

**なぜ世界を旅しようと思ったのか**

誰でもはじめての経験というのは、不安をおぼえるものですが、それでも僕が世界を旅しようと思いついたのは、主に二つの理由からでした。

一つは、「異なる価値観を知りたいから」でした。日本で生まれ、日本で育った僕は、日本という社会しか見てきませんでした。日本という社会には、たとえば人を騙してはいけない、モノを盗んでは

いけない、お年寄りには敬わないといけない、といった道徳的規範が存在しています。ところが、日本を出てみると、これらの規範が存在しない社会が見られるのではないだろうか、ふとそう思ったのです。またはひょっとすると、日本でよしとされていることが悪いとされていたり、日本でしてはいけないとされることが推奨されていたりする社会を知る機会も生まれるのではないかと。

たとえば、いま私たちは銀座をぶらぶらと歩いているとします。道路には特にゴミも落ちていなく、高級ブランド店が周りに多数あり、整然とした洗練された通りを歩いています。すると、通りすがりの男が、空き缶をポイ捨てしました。みなさんはどう思いますか？私たち日本人の多くは、その男に対して怒りを覚えるなど、良い印象を抱くことはないのではないかと思います。ところが、この光景をシンガポール人が見たらどうでしょう？シンガポールではゴミのポイ捨てには高い罰金が課せられるので、その男のモラルの無さに怒りを覚えるのを乗り越えて、なんと馬鹿なことをするのだろう、警察に見つかったら大変なのになあ、などとあきれたり、場合によっては同情をしたりするかもしれません。もし、中国人がポイ捨ての現場を見ていたらどう感じていたでしょう。中国といっても広いですから、ポイ捨てが当たり前のように行われている地域で育った方だと仮定しましょう。きっと特に何も感じないのではないのでしょうか。場合によっては、あまりに当たり前な光景であったがために、男がポイ捨てをしたことに気づきすらしないかもしれません。

アインシュタインはこう言いました、「常識とは、18歳までに身につけた偏見という名のコレクションである」と。彼が言った通り、私たちは知らず知らずのうちに、自分の育った環境に応じて形成された、偏見という名のフィルターを通して物事を見ています。先ほどのポイ捨ての例のように、一つの解釈しか存在しないはずだと断定できそうな物事には、実はさまざまな見方が存在しているのです。人は、世界を自分の都合のよいように切り取って見ているのです。僕は、アインシュタインの言う、悪い意味での「常識」を少しでも打ち破りたいとの思いで、海外渡航を志しました。

二つ目は、「本物にふれたいから」というものでした。人々の努力によって紡ぎ出された一流のモノに、僕は接してみたかったのです。それには、たとえばダ・ヴィンチが描いた絵画のように形のあるものはもちろんのこと、何世代にも渡る分析と研究により編み出された、絶妙な風味のインド料理のように、形のないものも含まれます。その土地の文化、芸能、あるいは自然だって、「本物」だと言えるはずで、教科書で学んだだけで知ったつもりになっていたものを、実際にその場に赴き、五感で感じるという体験をしたいと強く思ったのです。

## 異なる価値観に出会えたか

一つ目の目標である、「異なる価値観」に出会うことが達成できた具体的な例をいくつか紹介したいと思います。

衝撃的だったのは、中国の駅で乗車券を購入したときのことでした。日本であれば、「こちらが乗車

券でございます。」と言葉を添えて両手で乗車券が渡されるものですが、中国では、駅員はそっぽを向きながら黙ったまま乗車券を渡すだけではなく、こちらに向けて投げつけてくるのです。なんと態度の悪いことか、とはじめは思いましたが、他の駅でも駅員はみなこのようにして渡してくるので、怒りはおさまり、むしろなんだか異なる社会に来たことの感動や面白ささえも感じていました。

チェコのレストランでのことでした。日本では店員に案内されてからレストランに入るのが一般的ですが、ヨーロッパでは自分から腰掛けることが多いです。チェコでも僕はその流儀に従い、「Non-Reserved(自由席)」というパネルの置いてあった席に座りました。ふつう、しばらくしたらウェイターがやってくるのですが、15分ほど待っても僕のところには来ませんでした。他の客の対応はしているのに、です。その後、かなり待ってからようやくウェイターがやってきました。やっと注文ができる、と安心してると、なんと「Non-Reserved」のパネルを裏返して「Reserved」に変えて、「お前の席はない、帰ってくれ」と言ってきたのです。あまりに衝撃的だったので、言い返すこともせず、店を後にしました。もしかしたらこれは外国人である僕に対する差別だったのかもしれませんが、僕が単純にそのレストランの作法をわきまえていなかったという可能性も大いにありえます。少なくともこれは、日本とは異なる社会で得られた体験の一つだといえるはずで、日本では得られなかったであろう体験に、ここでは感謝の意を表明しておきたいと思います。

ヨーロッパはさまざまな点で、日本とは異なる社会でした。まず、チップと呼ばれる制度がその代表です。日本では高級レストランやバーでサービス料を課せられることはありますが、チップは存在しません。サービス料は、客が払う金額を「店側が」決めているのに対して、チップは、店員のサービスのよしあしに応じて、「客が」自分の裁量で金額を払うという違いがあります。ヨーロッパに存在するのは後者で、しかも国によって支払い方が若干異なります。ヨーロッパを旅していて、異なる国に移ったときにチップの払い方をその都度インターネットで調べたり、あるいは現金ではなくクレジットカードでもチップ込みの料金を払ってみたりと、経験値はかなり増えたと感じています。

鉄道で移動したときのことを思い返してみると、日本などの東アジアとヨーロッパでは違いが多くあります。端的に言うと、日本と中国の駅には改札があるのに対して、ヨーロッパには一切ないので、ヨーロッパでは、切符のチェックは、駅員が巡回することで行われます。その際、切符を持っていても、切符に乗車時刻の打刻がなされていないと罰金が課せられるという仕組みになっています。

ヨーロッパの中でもポーランドのスーパーを訪ねて気づいた点として、「アルコール」という棚に、ビールやワインが売っていなかったのもおもしろい違いでした。ビールは「ビール」というコーナーに、ワインは「ワイン」というコーナーに売られていました。どういうことかということ、ビールやワインはポーランド人にとって、「アルコール」ですらなく、水同然だということです。ヨーロッパ人はお酒に強いのだなあ、思いもよらぬ場所で感じました。

## 二つ目の目標は達成できたか

二つ目の目標は「本物にふれる」というものですが、ジャンルごとにいくつか思い出話をさせてください。

まず、遺産や名所についてです。万里の長城は、壮大であり非常に感動的でした。タワーからはそびえ立つ秋の山々を一望することができ、圧巻でした。カンボジアのアンコールの遺跡群は、やはり本物を前にしないと伝わらない迫力を放っていました。仏像や壁画は、驚くほど緻密で精巧なもので、1000年近くも昔の人々が作ったとは信じがたいものでした。

自然や景観については、マレーシアのボルネオ島の熱帯雨林で見た、テングザルやホタル、キナバル山の迫力、さらに、ラオスのルアンパバーンの町の風景など、美しい光景をこの目で見て、肌で感じる事ができ、心が豊かになった気がしました。

芸術もまた、僕の定義するところの「本物」に含まれる重要なものの一つですから、機会を見つけては積極的に味わうようにしていました。

タイではニューハーフショーなるものを見物しに行ったり、カンボジアでは現地の伝統芸能のアプサラダンス（写真右）を鑑賞したりしました。また、タイで映画を観ましたが、国歌が流れているときに、全員起立するという体験できたのは貴重です。ベトナムの戦争証跡博物館、カンボジアのキリング・フィールドでは、過去に行われた戦争や虐殺を、実感を伴って感じました。



最後に挙げるのは食文化ですが、これもまた重要な「本物」の一つです。タイのグリーンカレーやクイティアオ、タイスキや宮廷料理、ベトナムのフォーやバインセオ、ベトナム中部のホワイトローズやミークアン、シンガポールの海鮮ビーフンやタイガービール、ベトナムの333（バーバーバー）ビール、ハンガリーのパーリンカ、ポーランドのピエロギなど、それぞれの地域の名物料理を味わって、その都度感動に包まれていました。

## 得られた成果

「旅をして、何が得られたの？」-もう耳にタコができるほどその質問はされました。たぶん、「どこに行ってたの？」という質問の次にしつこくされる質問ですね。

僕の意見としては、この旅で得られた財産は、「旅」という経験それ自体だと思っています。いま思い出しても、異国で過ごしたどの一瞬一瞬も、かけがえのないすばらしいものです。一国一国思い出さずだけで、笑みがこぼれでてしまうほどです。

さきほどから紹介した二つの目標を達成して、大いに成長できたのはもちろんですが、ほかにも世界へ一人で飛び出してみたことでたくさん経験値がたくわえられました。世界での旅自体はもちろんのこと、旅に出る前に、資金をためるためにアルバイトを多数したこと、そして準備として何が必要かを吟味していろいろなものを購入したり調査をしたりしたこと、数多くの経験が、現在の僕の血となり肉となった、という気がしています。

そしてそれだけではなく、旅をしたあとに始まる、見方によっては平凡な大学生活を、有意義なものにできそうです。僕自身、勉強好きなものですから、異国にいたときには「勉強」が恋しくてたまりませんでした。帰国後、大学の先生方のお話を聞き、本を読んだりして自分なりに内容をまとめあげたり、自分自身の意見を構築したりという「学び」の体験を、充実したものにしているものの一つに、確実にこの旅は含まれているはずです。

さまざまな観点から、この旅は、僕を成長させてくれたものですし、それだけではなく、今後も僕を成長させてくれるスパイスになってくれるものだと思っています。僕の場合は留学とは違ったものですが、こういった経験を今後なされる方は、きっとたくさん得られるものがあると思います。大いに楽しんで下さい。

## 世界を通した自己の相対化

〈東京大学文科3類1年 山口 集〉

### 初めに

私は日本では珍しいギャップイヤー制度を使い、昨年6月から今年の3月の約10カ月間、日本の外に出て様々な国を訪れるという希有な機会を得た。以下になぜ私が今回の着想に至ったかという理由から、今回の経験でしたこと、そしてそこから得たものを述べていきたいと思う。

### なぜ大学初年次の1年に海外長期渡航をしたのか

高校1年生の15歳の春にタイに1週間滞在した。当初は同じアジアということもあり日本とさしたる違いはないのだろうと思っていたが、日常生活の一部として屋台でご飯を食べ、敬虔に仏教を信仰し、僧侶を尊敬する人々など実際には予想とは全く違った。その経験はあまりに衝撃的で、いかに自分が今まで日本とその文化の中に囚われていたのかということを感じた。そして、その経験から海外文化への興味が湧き始め、より多くの国を見て、より多くの文化を理解しようという思いにいたった。そのために高校を休学して1年間旅をしようと帰国後に考え始めた。

しかし、現実的に見て高校生が休学すること、それも受験を2年後に控えた高校生の休学は不可能に近いことに思え、高校卒業直後に長期の旅にでることを考えていた。その中でアメリカなどの大学では入学してから大学生活を始める前に1年間社会に出て経験を積むギャップイヤー制度と呼ばれる

制度があることを知り、アメリカへの進学を漠然と検討し始めた高校2年の7月ごろに偶然定期購読している新聞の夕刊の片隅に東京大学がFLY Program というギャップイヤー制度を「最大50万円の支援金付きで」来年度から始めるという記事を見つけた。俄に大学初年次の休学が現実味を帯びた瞬間であった。1年の旅でかかる莫大な予算の捻出に頭を悩ませていた中、資金面の援助を得て初年次に休学できる、この東京大学の制度は私にとってまたとない非常に魅力的なものであった。

### 海外長期渡航にあたっての準備

2014年4月、大学に入学し、FLY Program に採用されたことで、数年来の夢の世界1周に向けて、実際に準備を始める段階となった。具体的には以下に列挙する。

- ① 支援金金額が不透明な中、アルバイトなどでできる限り自ら稼ぐこと
- ② 英語の汎用度が低い地域で話される一方、その言語自体の汎用性が高いスペイン語・中国語の学習
- ③ 海外においてより安全を期すために、またその土地の文化をより深く理解するために、現地に在住する人や深い関係を持つ人とのコネクション作り
- ④ 日本には存在しない病気などに対する予防接種
- ⑤ 実際に旅をよくされている経験者の方にお話を伺い、アドバイスをいただくこと
- ⑥ 海外旅行保険や必要な荷物の買い出し、ビザ取得などその他の旅に向けての具体的な行動

これらの準備を主に4月～5月の2カ月間に渡って主に行った。特に時間と金銭面を圧迫したのが④である。黄熱病・腸チフスなどのワクチン接種は保険の対象外となるため、1回の接種につき1万円～2万円ほどかかる。また免疫をつけるために時間をおいて数回接種する必要性があり、私の場合は5月を丸々予防接種にあてることになった。

さらに⑥の海外旅行保険、その他の準備を含めると30万円近くが費やされることになり、①に書いたようなアルバイトで稼いだお金は事前準備のみで消えてしまうことになった。

②で書いたスペイン語・中国語の学習については、2カ月の短い期間ではあったが、東南アジア一帯でよく喋られているマンダリン、そして中南米の標準語であるスペイン語を学んだ。それぞれ詳しく後述するが、最低限自分の意思を伝えられるようになっていたことでそれらの地域でのコミュニケーションひいては実際にそれらの地域の理解が深まることへとつながった。

③で述べた、コネクション作りだが、知人の方の紹介から、全く知らない人へ直接アポイントメントを取るなど幅広く行った。こうして知り得た現地に精通した日本人・日系人の方々に現地でお会いすると、生活していくことで知ることができるその国の姿、文化をスムーズにかつ深く理解することができた。

## プログラム実行

実際に訪れた 28 カ国全ての国・地域について言及することは紙幅の関係上行わない。ここでは特に印象的であった国をいくつか述べていく。

### (1) イラン

イランは 2014 年 11 月 15 日～30 日の約 2 週間訪れ、テヘランからシーラーズまでを縦断した。イランと聞くと多くの日本に居住する人は「テロ」「戦争」「危険」といった言葉を思い浮かべる。(ペルシャと言えば途端にイメージは変わるが)しかし、訪れて、実際に感じたイランの実像は想像していたものとは全く異なっていた。人々は今まで訪問したどの国よりも親切で、この短い滞在期間中にも旅をしている客人として扱われた私は何度もチャイやご飯をおごられた。

### (2) メキシコ

メキシコには 2 月 12 日～2 月 28 日まで滞在した。アグアスカリエンテス、メキシコシティ、プエブラやテカマチャルコなどの都市を訪問した。

アグアスカリエンテスでは市内に 2 つ日産の生産工場があるため、日系人を含めて日本人の方が非常に多く、街中でも日本語の看板をいくつか見かけた。アグアスカリエンテスに日産が生産工場を敷設した理由としては以下の 5 つが挙げられる。①水資源がメキシコにおいては比較的豊富であり、工業用水が不足する恐れがない。②白人系が多く、穏やかな土地柄である。③地理的にメキシコの真ん中に位置し、自動車をメキシコに拡散するのに利便性が高い。④アグアスカリエンテスで繊維産業が衰退していた中、街が誘致に熱心であった。⑤以前の生産工場で組合と大きなトラブルがあった日産としては、組合が雇用主と穏やかな関係であるアグアスカリエンテスが魅力的であった。このような実際の企業進出の姿を知ることができたことは大きな収穫であった。

テカマチャルコでは、化粧をした「死者」達による劇で、死というものは過去を教えてくれる生と一続きの存在であるとするメキシコのインディヘナの死生観や、いかにインディヘナが暴力などで半強制的にキリスト教へ改宗していったのかということを知った。また、街のシンボルである Convento という教会では日本に初上陸(千葉県御宿沖に漂着後、徳川家康に謁見)したメキシコ人ロドリゴデビベーロの墓を訪れ、日本とメキシコの縁を再認識した。

## ギャップイヤーについて

帰国して出会った同学に FLY Program について聞いてみると、FLY Program が「学校の定めた留学制度であり、既存の所定のプログラムを遂行するもの」といった誤解が多く見られた。総じて、プログラムに対する理解や認知度そのものが薄く、現にこのプログラムの利用者は年々減少して、今年は 3 期目にして発足当初の第 1 期の半分以下の僅か 5 名の参加者しか集まらなかった。これは、上記の大学側の PR や社会周知の不足以外にも、まだギャップイヤーという制度になじみの無いこの国では学

生側が制度の利用に尻窄みをしてしまうという現状がある。特に、応募期間が入学準備で多忙な時期に重なり、事前に情報を知り得ていないと応募に踏み切れないということがあると思われる。ギャップイヤーという制度から得られる体験は既に述べたように、かけがえのない貴重なものであり、今後の一層の普及・発展が望まれるが、まずは社会でのギャップイヤーに対する周知が肝要であると思われる。

# ブラジル国費海外留学プログラム

「国境なき科学」によるブラジル人留学生の受入

—ブラジル国費学生海外派遣プログラムを通じた大学国際化—

Study Abroad Program with Brazilian Government

Scholarship ‘Science without Borders’ :

Globalization through Brazilian Government Scholarship Program

筑波大学グローバルコモンズ（生命環境系） 野村 名可男

NOMURA Nakao

Global Commons Organization, Faculty of Life and Environmental Sciences,

University of Tsukuba

キーワード：国境なき科学、短期留学生、ブラジル

## 1. はじめに

様々な分野でグローバル化が急速に進むなか、異文化を理解し、十分なコミュニケーション能力で国際的に活躍し、日本の将来の発展を支えることが期待される、いわゆる‘グローバル人材’への官民団体からの需要が高まっている。その要求に応えるべく日本の大学の国際化は急務となっている。グローバル人材育成を現実のものとするため、日本学生支援機構などによる日本人学生の海外留学、外国人留学生の受入を支援する様々な事業が実施されている。このような動きは日本に限らず諸外国でも活発化しており、ブラジルでは理工系人材育成のために「国境なき科学」計画（Ciencia sem Fronteiras）による全世界への学生海外派遣事業が政府主導で実施されており、2013年から理工系分野を有する日本の大学への派遣が開始されている。本報告書では「国境なき科学」計画の筑波大学での概況、それに伴う大学国際化について紹介する。

## 2. 「国境なき科学」プログラムによる短期留学生受入の概況

ブラジル政府公表によると2015年までに10万人の学生派遣を目標としており、これまで見込み数

を含め約 440 名<sup>1</sup>の学生が日本に留学している。筑波大学では平成 25 年度から受入を開始しており、受入状況を表 1 に示した。

表 1 筑波大学における「国境なき科学」学生受け入れ状況（学群・大学院、年度別学生数）

	平成 25 年度	平成 26 年度		平成 27 年度	
	秋学期 (2013. 10-2014. 3)	春学期 (2014. 4-2014. 9)	秋学期 (2014. 10-2015. 3)	春学期 (2015. 4-2015. 9)	秋学期* (2015. 10-2016. 3)
学群	10	20	12	5	19
大学院	1	0	0	0	0

\*平成 27 年 7 月時点での予定

「国境なき科学」では、学部・大学院レベルの学生交流が計画されており、大学院では学位取得を目的とした大学院課程への入学も含まれているが、筑波大学ではほとんどが学群（他大学における学部に相当）レベルでの短期留学生在が入学している。筑波大学では「国境なき科学」による短期留学生に対して、2 種類の身分を提供している。主に科目履修を目的として入学する学群学生または大学院生を「特別聴講学生」として、学内教員の指導を受け特定分野における研究、実験を目的とした大学院生を「特別研究学生」として受け入れている。特別聴講学生は、母国所属大学の専攻または所属教育組織と類似の筑波大学の学類に所属し、学類教員が留学時の担当教員としてカリキュラム作成や留学生生活一般における個別指導を担当している。また、筑波大学では、短期留学生に対して、日本人学生をチューターとして担当させることでさらにきめ細かい支援体制を整えている。チューター制度は短期留学生の支援だけではなく、留学生支援を通して日本人学生の国際性涵養、コミュニケーション能力向上も目的としている。また、筑波大学では約 4,000 部屋の学生宿舎を学内に完備している。現在、全学生数は約 17,000 名であるが、外国人留学生に対しては優先的に宿舎を提供している。多くの宿舎では日本人と外国人留学生が混在する形態をとっている。学内宿舎利用にかかる費用は、学外の賃貸住宅に比較して安価であるが、一部老朽化している建物があり（現在改築工事实施中）、室内に空調や浴室・トイレが完備されていない部屋もあることから、学外の賃貸住宅を選択する外国人留学生も少なくない。「国境なき科学」で入学するブラジル人留学生はこれまで全員が入学時に学内宿舎に入居し、ほとんどが帰国まで学内宿舎に滞在している。学外の賃貸住宅へ転居するブラジル人留学生も一部見られたが、その場合は複数名で部屋をシェアできる賃貸物件を各自で見つけ転居している。大学として賃貸住宅契約の際の保証などについて支援を提供している。

<sup>1</sup> 「国境なき科学」計画（ブラジル政府派遣留学生）[http://www.jasso.go.jp/study\\_j/csf.html](http://www.jasso.go.jp/study_j/csf.html)

図1に学群受入学生の筑波大学における所属教育組織を示した。日本への留学に際してブラジル人留学生の多くは先端技術、とくに IT などの工学分野での学修を期待する学生が多く、本学でも情報科学、工学システムといった工学系の学類への所属学生が50%を占めている。また、バイオテクノロジー、生物多様性、地球科学分野における学修を希望するブラジル人留学生も多く見られる。

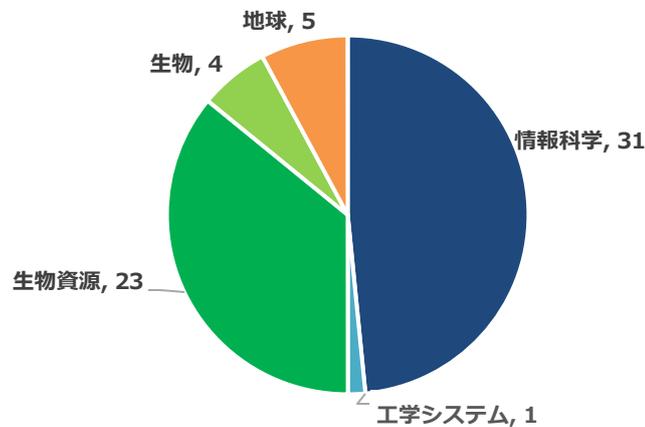


図1. 筑波大学における「国境なき科学」ブラジル人留学生受入状況  
(H27年8月時点での学類別学生数)

筑波大学では特別聴講学生に対して JTP (Junior year at Tsukuba Program) 科目が提供されている。JTP 科目は短期留学生に対して提供される英語による科目群で、ほとんどの学類から科目が開講されており、総科目数は約 350 科目である。(http://www.global.tsukuba.ac.jp/sites/default/files/JTP%E3%83%91%E3%83%B3%E3%83%952015-2016.pdf) また、グローバル 30 プログラムに伴い開設された英語による学士課程が 3 プログラム実施されており、開講科目の多くが「国境なき科学」で入学したブラジル人留学生に提供されている (http://www.global.tsukuba.ac.jp/)。3 プログラムは、それぞれ、社会国際、生命環境、医療科学分野で、特に生命環境分野の英語プログラム (生命環境学際プログラム (http://www.global.tsukuba.ac.jp/departments/life-and-environmental-science)) の開講科目は短期留学生に対して多くの科目が開講されており、生物資源、生物、地球学類に入学するブラジル人留学生が多い一因となっている。また、日本語・日本事情科目の履修を希望するブラジル人留学生に対して受講生の日本語レベルに適した 9 段階の日本語クラスが開講されている。また、履修前にプレースメントテストを受験することが義務付けられており、各学生がレベルに適したクラスを履修できるようになっている。

このように筑波大学では科目履修を目的とする短期留学生に対して比較適豊富な提供科目を有しているが、さらにこれら科目の英語シラバスを完備し WEB 上で公開している。これはブラジル人留学生が履修予定科目に関する十分な情報を得て留学中の学修計画を立てることで、渡日前に母国所属大学の指導教員またはカリキュラム担当教員から適切な学修計画に関する指導や助言を得ることができ、

さらに帰国後のスムーズな単位振替の申請を行うことができる。前述のように日本語クラスを希望するブラジル人留学生は履修前にプレースメントテストを受験し、その後レベルおよび履修時限が決定されるため、日本語クラスの時間が渡日前に履修を予定していた専門科目や教養科目と重複してしまう可能性があるが、この問題を回避するため、プレースメントテストをWEB上で渡日前に受験できる制度を構築している。「国境なき科学」によるブラジル人留学生は約半数が日本語クラスを履修しているがそのレベルは初級から中級程度である。

また、筑波大学では特別聴講学生は特定の教育組織（学類）に所属しているものの、他学類で開講される科目の履修を最大限可能としている。これは筑波大学が目指す、地球規模課題解決に貢献できる人材育成には、より学際的な教育が必要であるが、学生が他組織で開講される科目を履修することで自分のキャリア形成に必要な学際的な知識を得られるようにしている。学部レベルの学生は将来の目的や進路に関する希望は持っても具体的な履修すべき科目についての決定に助言等が必要な場合があるため、所属組織の担当指導教員が必要に応じてアドバイスし、学生のキャリア形成に適したカリキュラム作成を支援している。

筑波大学の学生は学期初めに科目登録機関に科目履修システムを通して履修科目の入力を行うが、特別聴講学生についてはこれに加えて、授業の初回出席時に特別聴講学生としての履修を希望する旨を直接科目担当教員に伝え、科目履修の許可を得るように指導している。通常よりも手続きが増えてしまうが、学生と科目指導教員が直接面談することにより、特別聴講学生が担当科目の履修に十分な基礎知識、バックグラウンドを備えているか確認できる。

また、「国境なき科学」によるブラジル人留学生で科目履修の目的で特別聴講学生として入学した学生は、母国の所属大学で3～4年生であり、筑波大学での履修科目は専門科目が大半を占めるが、多くのブラジル人留学生が講義などの座学による科目履修だけではなく専門分野の実験や研究、さらにはインターンシップに参加したいという希望を持っている。そこで、いくつかの学類では「特別研究」といった研究主体の科目を開講しており、ブラジル人留学生が専門に関係した研究室での実験やセミナーに参加できるようになっている。

### 3. 短期留学生受け入れと大学国際化と今後の展望

大学改革、大学のグローバル化を支援する様々な大型プロジェクトにより多くの大学が外国人留学生受入・日本人学生海外派遣に係る学生数の数値目標を掲げている。プログラム全体を見通しながらプログラムの方向性、学内外との調整を考慮しつつ目標に向けて様々な事業を推進していくことが重要であるが、学生の受入・派遣に関しては、飛躍的な学生数の増大が求められるため、従来の受入・派遣体制の大きな改定が必要であり、多くの大学では支援体制がキャパシティ限界近くに達している。グローバル30事業などで多くの英語プログラムが開設され留学生受入に貢献しているものの、学位取

得を目的とした外国人留学生数の増加は数値目標に貢献できるほどには及ばず、より伸び幅の大きい短期間での受入・派遣の増加が期待されている。これに伴い、筑波大学でも短期留学生受入に係るチューター、指導教員などの諸制度、受入事務体制についてより多くの外国人留学生に対応できるよう修正すべく検討が進められている。受入・派遣は常に連携して支援体制を整える必要があり、大学間協定による学生交流では受入・派遣の数について常に厳密にバランスを確認することになっている。一般に、受入過多になりやすいアジアの協定校に対しては、日本人学生派遣をさらに推進することが必須であり、大学の世界展開力強化事業で実施されているキャンパスアジア、AIMS プログラムはこれに大きく貢献している。さらに、派遣過多になりやすい欧米の協定校に対しては受入学生を増加する戦略策定が必要で、受入短期留学生に対する日本語日本文化教育の強化や、協定校の休業中に実施するサマープログラム開設が重要となる。

本稿で取り上げている「国境なき科学」計画ではブラジル国費による学生海外派遣事業であり、留学生受入増加を目指している大学にとっては好機会であり、大学の独自性を生かして多くの外国人留学生を受け入れるべきである。筑波大学でも英語学士プログラムによる開設科目の提供や教育組織を超えた科目履修を可能とする学際教育を活かしてできる限り多くの外国人留学生を受け入れてきた。しかしながら、「国境なき科学」計画は日本だけではなく全世界へブラジル人学生を派遣しようとする試みであるが、残念ながら日本を選択するブラジル人留学生の割合はまだ低い<sup>2</sup>。筑波大学に入学したブラジル人留学生を集めて定期的にミーティングを行っているが、そこで日本を選択した理由を聞いてみると、「日本の先端技術や教育システムに興味がある。」と回答したブラジル人留学生が大半であった。また、約半数を占める日系人学生については日本語習得を目的とする学生も見られた。また、多くの学生、特にブラジルの地方大学出身の学生は日本の大学の情報が十分ではないとの意見があった。今後、さらなる受入増加を目指すためには日本の大学の特徴、強みをさらにブラジル人学生に広報する必要がある。また、これまで「国境なき科学」で日本へ留学したブラジル人留学生による帰国報告会を実施しブラジルの大学生と経験を共有したり、「国境なき科学」日本留学生の同窓会ネットワークを組織化するののもよい方法であると考えられる。さらに、ブラジルに限らず同種のプログラムがトルコ、サウジアラビアでも実施されており、「国境なき科学」計画での戦略的な短期留学生受入や広報戦略は他国での同種事業による派遣学生受入に役立つ点も多いと考えられ、「国境なき科学」計画での経験を生かした今後の短期留学生受入増加が期待される。

<sup>2</sup> 2014年度の応募者のうち日本を希望した者は全体の1.1%となる518名(アジア地域の応募者の約半数)。  
(<http://www.cienciasemfronteiras.gov.br/web/csf/dados-chamadas-graduacao-sandui che>)

## 次号予告

ウェブマガジン『留学交流』 9月号  
特集「外国人留学生の宿舎支援と活用」  
宿舎における外国人留学生と日本人学生の交流、宿舎探し



ウェブマガジン『留学交流』 8月号

Vol. 53

平成27年8月10日発行

編集 独立行政法人日本学生支援機構

(編集部) 留学情報課

東京都江東区青海 2-2-1 (〒135-8630)

電話 (03)5520-6111

FAX (03)5520-6121

Eメールアドレス [ij@jasso.go.jp](mailto:ij@jasso.go.jp)

### 編集後記

夏の長期休暇期間が始まり、多くの日本人学生が大学等の短期留学プログラムを活用して留学に出発しています。本号では、海外留学することの意義と題し、経年での留学体験のインパクト、人文社会科学系の海外留学について考察するとともに、事例として、始動から1年を迎えたトビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム、産学連携を活用した派遣プログラム、ギャップイヤー体験談について取り上げております。また、外国政府の留学プログラム事例として、ブラジルの「国境なき科学」をご紹介します。本号が、海外留学に携わる関係者のみなさまの参考となることを願っています。

(編集部)

### Web Magazine “Ryugakukoryu”(Student Exchanges)

“Ryugakukoryu” delivers a variety of necessary information and materials to faculty and staff engaged in acceptance and dispatch of international students, and educational guidance.

The magazine has been made public online without charge since April 2011.  
(Issue date: 10th of each month)